
魔法少女リリカルなのは～氷原の支配者～

株式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは氷原の支配者

【Nコード】

N1272L

【作者名】

株式

【あらすじ】

藍染惣右介の目的が空座町だとわかった日番谷冬獅郎率いる日番谷先遣隊。襲撃に備えて力をつけていく中、破面の2度目の襲撃が行われた。

相手がエスパードということもあり苦戦する日番谷たち。しかし戦いの中、破面の内の一人の体が突然の光りだし、その光りに飲み込まれてしまった。

目を覚ました時はそこは知らない場所だった。

第一話 死神（前書き）

なんかプロローグがおかしくなった

初めてなので操作が解らんorz

第一話 死神

「よかつたんです？ 藍染隊長」

一人の男が呟く

「何がだい？ ギン」

それに一人の男が答える

「ルピ君の事です。僕あの子の事けっこう気にいつてたんですよ、話し相手にもなってくれて・・・」

「問題ないさ、エスパーダなどただの道具に過ぎないよ。ルピは少し壊れるのが早かったというだけの事だよ」

たいして興味がなさそうな反応で返事をする

「それにしても何をなさったんです？ ルピ君いきなり消えてもうてもうびっくりですわ」

「少し反膜の匪を改良してね。見ていただろう？ 一定の範囲まで効果があるようにした」

「ほんで他の死神達も消えてもうたんですか」

「死神にも効果があるのか試してみた。案の定一緒に行ってくれたみたいだ」

男は不適に笑いながらあるものの前まで進んでいく

「私にはこの崩玉さえあれば他は何もいらないよ」

そうして男は崩玉を手に取り呟く

「さあ、最後の仕上げといいか・・・」

「・・・ここは」

一人の少年が目覚めます

何が起こったか理解できないような顔をしている

ふと隣をみると自分の副官が倒れているねのに気がついた

「起きろ松本・・・」

隣に倒れている自分の副官を起こしながら周りを見渡す

すると他にも倒れている連中を見つけた

「斑目・綾瀬川っ「隊長？」・・・起きたか松本」

「ここは・・・どこですか・・・隊長」

まだエスパードとの戦闘でのダメージがあるのかふらつきながら松本が日番谷間に問い掛ける

「大丈夫か松本」

松本は軽く首を縦にふるが顔は少し歪んでいる

「ここは現世なのか・・・」

先程まで戦っていた場所『現世』、しかし何か違う。先ほどまで戦っていた破面の霊圧がない。それに現世とは霊圧濃度が全然違うのだ、異様な程に高い。

「日番谷隊長・・・ここは？」

「目が覚めたか斑目、綾瀬川」

「僕達・・・破面と戦ってる途中いきなり光りに飲み込まれて・・・どうなってるんですか？」

「とにかく、エスパードの反応がない。今の内に傷を癒すぞ、次またいつくるかわかんねえからな」

「隊長、尸魂界への連絡はどうします？」

「俺がやつとく、お前らは休め」

そう言つと日番谷は伝令神機を取り出して操作する

しかし

「繋がらねえ・・・」

日番谷の頭の中は最悪の状況を思い描いていた

「日番谷隊長！、ここ現世よりも霊圧濃度が「綾瀬川」・・・日番谷隊長？」

「俺達是最悪な状況に陥つたかもしれねえ・・・」

そう、現世ではない

しかも尸魂界との連絡も繋がらない

（ここからどうするか・・・）

その時

「時空管理局だ、武器を捨てろ、話を聞かせて貰う」

そこには中年くらいの男が部下らしき者を数名連れて空を飛んでいた

第一話 死神（後書き）

なるべく早く更新するように心掛けますです。

第二話 管理局

「ぐああ・・・」

一人の男が苦痛に顔を歪める

周りにも男の部下らしき者が気絶しているが一人として意識がある者はいない。

(・・・こいつら・・・強い・・・)

見たこともない服を着て刀を持っている。しかしそれが脅威ではない。恐れるべきはその身体能力だった。男は油断はしてなかったしいつ襲われても対処できる自信があった。相手が何かしゃべった後、男のほうを向いて、そして・・・消える。

男は気付いたら地面に倒れていた

男は倒れた体を無理に起こした。

「へえ・・・まだ立てんのか」

連中の内の一人がしゃべっていたが男には聞こえていないようだ

(早く・・・仲間を・・・)

しかしそこで男は意識を無くした。

「なんだぁ・・・あいつら」

一角は空を飛んでいる男達を見て言った

「隊長・・・あれは!？」

松本が日番谷に問い掛けるが日番谷が知るよしもない

「死神・・・じゃねえなあ」

男達の外見は死神とは全然違う。持っている物も斬魄刀ではない、杖のようなものだ。そしてなにより・・・

「彼ら・・・霊圧とはなにか違う威圧感を感じるね・・・」

弓親が言うことを日番谷も不思議に思っていた

（死神じゃない・・・しかし仮面がないことから破面にも見えない・・・それにあいつが言っていた・・・）

男が言っていた言葉が日番谷の中で引っ掛かっていた

「時空管理局・・・」

日番谷は聞いた事のない
言葉に戸惑っていた

（時空管理局・・・何かの組織か？）

聞いた事がないのだ

それでも日番谷は自分を優秀なほうだと思っている。かつて自分程の年齢で『隊長』という肩書まで上り詰めた者はいないだろう。隊長になるために必要な知識や強さは全て身につけている。だが『時空管理局』という言葉は聞いたことがない。故にどう対処すべきか困っていた。

つまりこれは・・・

『第三勢力』

日番谷が危惧の念を抱いたのは組織の名前『時空管理局』だ。もしこの名前のとおり時空を移動できるのだとしたら尸魂界が攻撃されてもおかしくない。可能性が低いとしても『0』ではない。この破面との大事な決戦の時に得体の知れない組織をここで敵に回す訳にはいけないと思ったのだ

しかしここで捕まるのはもつと得策じゃない。反応を見る限り向こうもこちらの事を知らないだろう。そうすればほぼ間違いなく自分達は研究の材料とされる、そうすれば帰る頃には破面との戦いは間違いなく終わっている。いや帰れるという保証すらない。

故に日番谷の出した答えは・・・

「斑目・綾瀬川・松本」

「「「はい」「」

「やるぞ・・・」

「「「はい！！！！」「」

そして死神達はそれぞれの斬魄刀を握ってその場から瞬歩で消える。移動した瞬間男の目が見開いていたが一角が後頭部に一撃喰らわせた「があっ・・・」

隊長らしき男が一角の一撃をくらい地面に落ちていく

「隊長!!」

隊員達は何が起きたか解らなかった。いきなり捕まえるべき対象が消えたと思ったら次は隊長に何かが起こった

そして

「ぐあっ・・・」

「があっ・・・」

「あがぁ・・・」

次々と他の隊員達もやられて地に落ちていく。

三分もしない内に片が付いた

「なんだぁ、案外呆気ねえなぁ」

一角がつまらなさそうに斬魄刀を鞘に納める

「まったく・・・瞬歩だけで勝てちゃうなんてね」

弓親も何か物足りない様子をしている。十一番隊の二人としては少し不服なのだろう

「隊長おゝ疲れましたゝ」

「ここからどうするか・・・」

日番谷がどうするか考えていたら

「はあ・・・はあ・・・」

さっき倒した男が立ち上がっていた

「へえ・・・まだ立てんのか」

一角が面白そうに笑うが

《バタリ》とまた倒れてしまう

「とりあえず一旦ここから離れるぞ。

こいつ等の仲間が来たら面倒だ」

倒れた男を気にもとめずに日番谷が歩きだす

「へえゝい」

一角達も歩きだした

自分達が違う世界にいるとも知らずに・・・

第二話 管理局（後書き）

更新は基本的に遅いですけど頑張ります

第三話 出会い 前編

「皆、そんなに緊張しないで。いつも訓練でやってるようになればいいから」

「……は、はい!!」「……」

そこに居るのは一人の女性と四人の子供。

「キャラもそんな顔しないで」

「……はい」

見るからに緊張している

当然だ、まだ十歳にもならない子供が戦いに行くのだ。下手をすれば死ぬかもしれない戦場へ。

しかもこの子供達にとって初めての实战。緊張しないはずがない

「キャラは一人じゃないよ。それにキャラの力は皆を守ってあげられる優しくて強い力なんだから」

「はい、なのはさん」

女性がキャラに言葉をかける。どうやら少し緊張がほぐれたようだ

「じゃあ空は私達に任せて。レリックをお願いね」

そう言うと女性はヘリから飛び降りた

「いくよ、レイジングハート」

『Stand by, ready.』

「レイジングハート、セーット・アップ」

そう言うとなのはの姿が先程の教官服から白いBJにみるみるうちに変わっていく

そしてBJに切り替えたなのはそのまま自分のすべきこと、ガジェットを倒す為に空を駆け巡る

「スターズ1、高町なのは、行きます!!」

「皆さんの任務は2つ、一つはガジェットを逃走させずに全機破壊すること、そしてもう一つは安全にレリックを確保することです」

ヘリの中、妖精のような女の子が今回の任務をFW陣達に説明している。

「スターズ分隊とライトニング分隊、それぞれ前後の車両からガジ

エットを破壊して先にレリックにたどり着いたほうが回収するです
う」

「『『『はい!!』『』『』」

いい返事ですうとリインがニツコリ笑う

「それと、ついさっきリイン達のところに少し嫌なお知らせが入りました」

「嫌なお知らせ?」

F W陣の内の一人、ティアナが反応した

「はいですう。先程何者かに航空武装隊の人達が襲われたそうです
う」

リインは少し指を縦て真剣に話し初める

「その人達の姿は真つ黒の服を着ていて四人組。このことはすでに
なのは隊長とフェイト隊長にも伝わっているし犯人との接触の可能性も
低いですが、一応頭の中に残しといて下さいね」

「『『『はい!!』『』『』」

「隊長、ここ何処ですか？」

「・・・知るか」

日番谷達は迷いこんでいた。周りを見れば木しかない森の中に。

「なんでこんなとこに来たんですか、虫とか出そうで気持ち悪いのに、隊長みたいに爬虫類好きじゃないですよ私」

「俺も好きじゃねえよバカヤロー」

日番谷が呆れた様子で松本を見る

「さっきの奴らが俺達を探してるかもしれないねえんだ。なるべく人目の付かないとこに行くしかねえだろ」

「あんな雑魚どもまた返り討ちにすればいいじゃないですか」

「そういう訳にもいかないでしょ乱菊さん。組織の規模も分からずに倒し続ける訳にもいかないよ。それに僕らは次の破面戦に備えて休む必要もあるしね」

日番谷の代わりに弓親が説明する。日番谷もそういう事だと言わんばかりの顔をしている

「じゃあなんで戦ったんですか？話し合えば相手も見逃してくれたかも知れませんよ」

「その可能性は低い。未知数な敵が現れて野放しにしておくバカはいない、それが組織なら尚更な・・・もし話し合ってたらず中八苦俺達は連れて行かれてただろうな」

成る程と松本も納得したようだ

「それに・・・」

「？」

「涅みたいな奴がいたらどうする気だ？」

「「「！？」」」

その言葉に松本だけでなく一角と弓親も反応する

例え仲間でさえも恐ろしいあの涅みたいな者がもし敵にいたら。そう考えるだけで身の毛がよだつ

「人型保ってたなら良いほうだろうな」

「隊長・・・一生ついていきます」

日番谷への忠誠心がよりいっそう強まった松本だった

第三話 出会い 前編（後書き）

初めて感想が来たー（＾Ｏ＾）v

えんづいいさんありがとうございます（＾Ｏ＾）／

第四話 出会い 後編（前書き）

今回初めてSideを使ってみた

『こんなのSideじゃない!』という意見などあればどんどん感想に書きちゃってください

お手柔らかにね

第四話 出会い 後編

そこはとある森の中

死神達が斬魄刀で刈りとっていく

何も知らないこの世界で生き残る為に - - -

「隊長この木に成ってる実食べれると思いますか？」

「知るか・・・」

そう生き残る為に・・・？

「それにしても見た事ない実ばかりね。現世の食べ物仕事サボってでも食ベに行つてたからある程度把握してるのに・・・」

「今、何気にさらつと凄い事言わなかったか・・・松本」

「言つてませんよ。隊長お腹空き過ぎて幻聴でも聞こえたんじゃないですか？」

「・・・」

日番谷達は食料を集めていた

「で、何で俺達はこんな事してんだ・・・」

「いやですね隊長。敵に狙われてるこんな時ですよ。『腹が減つては戦はできぬ』じゃないですか。それに私餓死とか嫌ですしね」

「いや、俺達餓死しねえし。変なもん食つて腹壊したほうがよっぽど駄目だろ。つか木の実取るだけに斬魄刀使うな」

「もおゝ隊長そんな堅い事ばかり言ってたら生き残れませんよ」

「真っ先に死にそうなお前に言われたくねえ」

すると向こうの方から

「日番谷隊長おゝとびつきりデカイ猪と魚捕まえてきましたあー」

禪^{ふんどし}一丁で猪を担ぎ上げている一角と嫌そうに魚を持っている弓親が帰ってきた

「さあ猪鍋でもしましょう」

「美しくないなあゝ」

「はあ・・・」

状況が状況なだけにこの脳天気なメンバーを見てると頭が痛くなる
とため息をつく日番谷。しかし次の瞬間彼の顔が険しくなる

「!?!」

「どうしました?隊長」

「お前等感覚を研ぎ澄ませろ」

言われた通りに目をつぶって感覚を研ぎ澄ませる松本達

「・・・これは」

「何かを感じるね。」

「さっきの連中と同じくらいか。いや、段々デカイくなってきやがる」

「おそらくは移動中・・・しかし俺達の方にはこねえみたいだ」

しかし日番谷はどうするべきか迷っていた

本来死神の仕事は虚の処理、ブラスの魂葬と思われがちだが生きて
いる人間を守る事も死神の仕事だ。

今あるこの感覚はまだ大きくなる。これがもし人間に危害を及ぼす
なら自分達死神が止めなければならぬ。だかさっきの奴等と何ら
かの関係があるとすれば今姿を現わすのはまずい

「どうします、日番谷隊長」

弓親が話し掛けてくる

しばらく沈黙が続く

「・・・いくぞ」

そして日番谷は死神としての責務をとった

S i d e キ ャ ロ

機動六課に来てからの初めての仕事

レリックというロストロギアの回収

私の心はまだ落ち着かない

そんな私に優しい言葉をかけてきてくれた。手を繋いでくれた少年

友達などいなかった

ずっと一人だったから

だから嬉しかった

本当に

だから頑張ろうと思った

大切な人達を守る為に

私の力で

私達は今レリック回収の為にリニアールにいる。最初こそそんなにきつくなかったけど私とエリオくんの前に現れた新型のガジェット。AMFという魔法を打ち消す能力を持ち他のガジェットとは大きさも違う。

そんなガジェットにエリオくんがやられた。このままじゃリニアールから落ちて確実に死ぬ。

嫌だ！！まだ会って少ししか経ってないのに、やっと友達ができたのに、こんな所で死なせたくない！

「エリオ君！！」

私はとつさに飛び降りた。大切な人を守る為に、怖いけど失うのは嫌だから

もう少しで手が届く。

「あっつ！」

そんな時急な突風が私達の邪魔をする

そんな、もう少しで手が届いたのに。エリオ君との距離がどんどん離れていっちゃう！

地面がどんどん迫ってくる・・・もう駄目なのかなと思ったその時

「全く、無茶するわねえあんた達」

急に浮遊感が無くなった
誰かに担がれてるみたいだった

知らない声。なのはさんかフェイトさんが助けてくれたんだと最初
は思ったけど違った。

顔を上げると黒い服を着た女の人。あれ？・・・黒い服？

「はあい、大丈夫あんた達」

「あれ、私・・・エリオ君!？」

そうだエリオ君は！

「ううよ、うう」

女の人の指すほうを見る。エリオ君は私とは逆の右脇に抱えられて
いた

「よかった・・・本当に・・・」

私は安堵の言葉を漏らした。ほんのちよっぴり泣いていたかもしれない

そのまま女の人は私達を地面に下ろして『じゃあねえ』とどこかに行ってしまった

「う・ん・ん・んこは」

「エリオ君！」

私は目を覚ましたエリオ君に飛び付いた

「き、キャロ!？」

エリオ君の顔が紅くなっていく。でも私の顔は今涙とかで汚れているだろう

「よかったよう・・・本当に」

「・・・心配かけてごめん」

「うん・・・」

このあと私はすぐに助かった経緯を話した

「黒い服の女の人か・・・今度会ったらちゃんと御礼言わなくちゃ」

「そうだね・・・また会えるといいね・・・・・ってあー!!」

「どうしたの？」

私の大声にエリオ君がとてもびっくりしてる・・・でも

「エリオ君・・・黒い服つてもしかしてリインフォースさんが行つてた・・・」

「・・・ああ！！！！」

私達はお互い忘れられないくらい凄い顔をしていた

S i d e キ ャ ロ e n d

「リインフォース曹長がライトニング3、4と合流、二人共無事です！」

「スターズ3、4も黒服と接触したようです！」

「他、重要貨物室に侵入者あり！このままではレリックが」

「たった今、スターズ1とライトニング1が空の制圧完了！急いでレリックの回収、及び黒服の捕獲に向かっています」

「今からスターズ1とライトニング1の限定解除の申請するから二人にそう伝えときい」

様々な言葉が交差しあう

機動六課の部隊長である八神はやてもいかなりの黒服の出現に驚きながらも的確な指示を出している

油断していた

黒服が来る事はないと
だが来てしまった

はやてはとても苦そうな顔をして

「みんな気をつけるんやで・・・」

一人小さな声で呟いた

「これは・・・」

日番谷は重要貨物室にあるレリックの前まで来ていた。松本は着くなり二人の子供を助けに行き、一角と弓親には周りにいたガジェットを倒すように言っただけで自分が謎の威圧感を放つ何かの調査に行ったのだ

「まさかこんな物が・・・」

結果は日番谷が予測しなかったものだった

日番谷はこの謎の威圧感から確実に生物か何かだと断定していたからだ。そう、自分達が今戦っている破面のような

「しかたねえ、これも一度尸魂界に「動かないで」・・・」

日番谷はゆっくりと振り返り数メートル先にいる女性を見る

「時空管理局です・・・って子供!？」

その女性高町なのはまさか子供とは思わずに驚きの声をあげる。しかし見るところ少年の背中に刀があるので構えは解かない

「黒い服に刀・・・君が航空武装隊を襲った人なの？」

こんな子供がそんな事をしたなんて思いたくないと違う事を願うのは

「時空管理局・・・さっきの連中の仲間か」

「つつ・・・君を捕まえてお話を聞かせてもらつよ!!」

武器の標準を日番谷に向けるのは。日番谷も背中の斬魄刀に手をかけた

第四話 出会い 後編（後書き）

次回戦闘シーンですね

一角と弓親もこれからどんどん使っていくつもりです

第五話 思惑（前書き）

テストとかいろいろしてたら遅くなってしまった・・・

第五話 思惑

「凄い・・・」

一方、ガジェットの破壊とレリックの回収という任務を果たさなければならぬスバルは二人の男から目が離せずにいる

突然現れた二人の黒服の男、次々とガジェットを刀のような物で斬っていく。

「誰だろ・・・あの人達」

ただ二人の男を眺めているスバル。次から次にガジェットを斬り捨てていく姿を見てカッコイイと思っていた。

だからこそ後ろからガジェットの触手が近づいてきているのに気が付くのが遅れてしまった

「!?!?・・・しまった!?!」

慌てて後ろを振り向くが既に対処が間に合わないところまで来た。しかし

『ドオン』

何処からか魔力弾が飛んできて、ガジェットが爆発した

スバルは魔力弾の飛んできた方向に目を向ける

「あ、ティア」

「あ、ティアじゃない！油断しすぎよ馬鹿スバル！！」

「う、うん。ごめん・・・」

ティアナがスバルの元に移動する。

「もうガジェットはいないわね」

「あ、うん。あの人達が全部倒しちゃった」

そっついながらスバルは男達の方を指差す。

それを見たティアナは驚いた顔をしてスバルの手を引き隠れるように物影に身を寄せた。

「ちよっ！？ティア！？」

「うっさい馬鹿スバル。黙ってなさい」

スバルは訳が解らないといった顔をしてティアナを見る

「どうしたのティア？」

今度は怒られないように小声で話しかけるスバル

「多分だけどあの人達リイン曹長が言ってた航空武装隊を襲った黒

服の集団・・・」

「あ!!」

スバルがさもビックリして口を手で抑えている

（でも報告にあった人数は四人・・・此处にいるのは二人・・・なら残りの二人は・・・）

ティアナは頭をフル回転させながら考える。

何故黒服がこんな所にいるのか。

何故二人欠けているのか

目的は何なのか

そしてティアナが辿り着いた答えは

（レリックが!?!）

そう思った瞬間ティアナは二人の男の前に姿を現し自分の武器であるクロスミラーージュを構えて言った

「時空管理局です。こんな所で何をしているのか詳しい話しを聞かせて貰います!!」

物影に隠れていたスバルも姿を現した

「どうする一角・・・」

自分達の前に突然現れた二人の少女に警戒する弓親。

見た目はまだ成人にも満たない女の子、しかしその手には銃のような武器を持ちこちらに銃口を向けている。

そしてなにより少女の口からでてきた『時空管理局』という言葉・・・

「答えて下さい!!」

少女が声を張り上げて言う

「しゃゝねえゝ適当に気絶させるか」

「了解」

言い終わると一角は瞬歩を使って少女の後ろに回りこむ

「!？」

いきなり消えた一角に戸惑うティアナ

しかし一角はそんな事は気にせずにティアナの後頭部に斬魄刀の柄を振り下ろす・・・

しかし

「はあああああ！！！」

その瞬間一角が柄を持っていた右手に真上から何かが振り下ろされた

「！！！」

反射的に右腕を引き後ろに後退する一角。

自分の右腕をみると死覇装が少し破れている。そして改めて前を見ると・・・

金色の髪をして真つ黒の服を着た女性・・・フェイトがティアナを守るようにして立っていた

「大丈夫？ティアナ・・・」

「は、はい」

フェイトは軽く微笑むと一角の方を向き鋭い視線で睨み付ける

「あなた達の目的は何ですか？」

一角はほくそ笑みながら・・・

「俺を倒せたら教えてやるよ」

斬魄刀を構え直した

「はあっ——」

「レイジングハート!!」

《p r o t e c t i o n》

日番谷がなのはに向かって斬魄刀を振り下ろすがなのはが魔法を使いそれを防御する

「シュート!!」

そしてなのはが言葉を発つた次の瞬間日番谷の周りにいつの間にか作られていた魔力弾が日番谷に向けて放たれた

《ドォン》

しかし魔力弾が目標を捉えて当たった場所に日番谷の姿はなく攻撃の跡だけが残っている。なのはが前を見ると既に一定の距離を保ちながら威嚇する日番谷

（この子・・・強い・・・）

なのはは日番谷を見てそう思った

外見どう見ても子供の姿をしているにも関わらず攻撃力、攻撃速度、身体能力、見切りの速さ、その他の実力も明らかに子供の粋を脱している

しかしなのはが一番驚いている事は

（この子、闘い慣れしている・・・）

日番谷に動揺や恐怖感といったものが一切感じられない事だった

（この戦闘が始まる前のキャラがそうだったようにこの歳ならば何らかの恐怖心をもっていないはず・・・なのにこの子、まるで何度もこんな闘いに身を投じてきたかのよう・・・）

なのはが思考している間に日番谷は瞬歩を使いなのはの後ろに周りこみ斬りかかる

「貰った・・・」

「・・・まだだよ」

すると日番谷の手足が光のような物で拘束された

いきなりの事で驚く日番谷
なのはがいつの間にか仕掛けていた設置型バインドに捕まってしま
ったのだ

「さあ勝負はついたよ。君には悪いけど一緒に来てもらおうよ」
すると日番谷が目を閉じ

「縛道の六十一・・・六杖光牢」

するとなのはの周りに三つの長方形のような光が現る

「なっ!？」

避ける暇も無くその光に貫かれるなのは。恐怖の反射で目を閉じて
しまう

「・・・」

しかし貫かれたにも関わらず痛みが来ない事に疑問を感じ恐る恐る
目を開ける

「あれ・・・痛くない？」

「捕縛専用の鬼道だからな・・・痛みはねえ」

バインドに捕まったままの日番谷が答える

「・・・・・・・・」

しばらく沈黙に包まれるが

「・・・ねえ、二人共動けないんだし少しお話しない？」

「話したと？」

「そう。貴方が何でレリックを狙っているのかとか・・・あつ、知ってるかもしれないけどちゃんと私達の事も答えるよ」

日番谷は少し考えた後

「・・・分かった」

静かに了承した

第五話 思惑（後書き）

戦闘シーンって難しいね・・・

感想・指摘などなど待ってます!!

第六話 会話（前書き）

今回も頑張りました！！

第六話 会話

日番谷、なのははそれぞれバインドと縛道に捕まった状態のまま話し始めた

「じゃあまず名前教えてくれる？私は高町なのはだよ。君は？」

「・・・日番谷冬獅郎だ」

日番谷は素っ気なく答えた。しかしなのはは答えてくれた事が嬉しかったのか嫌な顔一つせず笑顔を見せる

「冬獅郎君か・・・じゃあまず私の事から言っね」

相手を刺激しないため自分達の事から答えようとなのはは考えた

「冬獅郎君は魔法って知ってる」

「聞いた事はある。が、あくまでも空想上のものだろう・・・」

「ううん。魔法は確かに在るの。私がさっき使ってたのがそう」

「そうか・・・」

なのはの問いにまた素っ気なく返す日番谷

「あんまり驚かないんだね・・・」

「俺達も似たような技が使えるからな・・・」

日番谷にとっては魔法の存在は驚くほどのものではなかった

日頃から鬼道や瞬歩を使い、斬魄刀に名前があり具現化まで出来るのだ。魔法使いからして見ればこちらのほうが異常だろう

「そつえばさつき冬獅郎君が使ってたのは？やっぱり魔法とは違うの？」

「・・・ああ」

日番谷は一息溜めてから話し出した

「さつき俺が使ったのは鬼道という死神だけが使える技だ」

「・・・」

「・・・」

「何で黙る・・・」

「ごめん・・・もう一回言ってくれるかな・・・」

「さつき俺が使ったのは鬼道という死神だけが使える技だ」

「しい、死神くくく！?!?」

「うるせえ・・・でかい声だすな」

「じ、ごめん」

驚いたのかなのはは奇声のような声をだした。しかし日番谷に注意され口元を抑えるようにして黙り込む

「そ、その、死神ってやっぱり魂とか刈り取ったりするの・・・かな?」

そして内心まだ驚きながらも死神について聞き出した

「違う・・・」

一息つき説明し始める

「・・・死神の仕事は朽ちた魂・・・お前らで言う幽霊ってやつを尸魂界に導く事だ」

「尸魂界?」

「あの世の事だよ・・・」

死神の仕事について着々と説明し始める日番谷
なのはも聞き慣れない言葉に度々驚きながらも日番谷の話をしつかりと聞く

「じゃあ此処にいる理由は誰かの魂をその、《魂葬》だっけ？それをする為に？」

「いや、違う」

なのはの問いをキツパリと否定した日番谷

「此処に来た理由は巨大な霊圧を感じたからだ・・・」

霊圧と言う言葉も知らないのはだったが魔力と似たようなものと解釈して話しの続きを聞く事にした

「巨大な霊圧ってまさか・・・」

なのはは縛道に捕まったままなので首だけをその物の方へ向けた

「・・・そこにある物だ」

「レリック・・・」

日番谷に言われてレリックを見ていたなのはが徐々に顔を戻した
そして真剣な眼差しで

「あれは危険な物なんだよ。だから私達が回収して管理するの・・・」
「

「それが時空管理局か・・・」

「そう・・・だから私達に任せてほしいの」

日番谷は何かを考えるようにまぶたを閉じ意を決したように言った

「・・・悪いがそれはできねえ」

「えっ・・・」

まさか断られるとは思ってなかった様な顔をして言葉を漏らした

「こつちにも色々と事情があるからな。それに俺はまだお前らを信用した訳じゃねえ」

日番谷は冷酷に言い放つ

しかし実際日番谷は時空管理局を信用していない訳ではなかった。
なのはと一度闘い悪い奴じゃないと感じていたのだ。

しかし目の前に在る物が危険過ぎたのだ

巨大な霊圧を放つそれはなのはへの信用を薄らせるには十分だった

とゆうより時空管理局が本当に《管理》出来るのか――

日番谷はそう考えた。しかし尸魂界ならそれが出来る・・・

だから日番谷はなのはの申し出を断った

「君分かってるの！？本当に危険な物なんだよ！！」

「分かってるさ・・・だから俺達が持ち帰る」

二人が話しているとそこへ死覇装を着た女性が何処からともなく現れた

「・・・松本か」

「何してるんですか？」

「見てわかんねえか？捕まってるんだ」

「そんなのすぐ抜け出せるじゃないんですか？」

「まあな・・・」

そう言つと日番谷の周りの空気が変わった

日番谷は霊圧を高めてその名を口にし

「霜天に坐せ・・・」

開放した

「・・・氷輪丸」

すると日番谷を縛っていたバインドがみるみるうちに凍っていき・
・砕け散った

「!？」

自分が作ったバインドがあっさりと砕かれて驚愕ね表情に変わるな
のは

「松本、目的は果たした。斑目と綾瀬川に撤収の連絡を入れろ」

「はい」

そしてレリックを手に持ちなのはの方を向き・・・

「悪いな・・・」

そう言つて日番谷と松本は瞬歩を使いその場から立ち去った

「・・・」

するとなのはを拘束していた光が消えた。残ったなのはは苦い顔を
して力いっぱい手を握りしめた

「一角・・・日番谷隊長から撤収の命令が入ったよ」

伝令神機を片手に持ち今一角にそう告げる弓親

「「はぁ・・・はぁ・・・」」

見れば二人、フェイトと一角はお互いに何箇所かの斬り傷を負いながら向かい合っていた

「日番谷隊長も随分とてこずったみたいだね」

弓親がそう呟くと

「ああ、お蔭でこっちも随分と楽しめた・・・」

「みたいだね。一角も少しおされてたみたいだし。彼女強いよ。それに・・・」

弓親が一息溜めてから堂々と言い放った

「美しい——」

その言葉にフェイトは顔を少し赤らめるが息を乱しながらも構えを崩さずに一角達を見据える

「・・・逃がすと思っっているのですか？」

「君もそろそろ限界が近いだろう。そんな状態で追って来れるのかい？」

「くっ・・・」

弓親の指摘に言い返せないフェイト。フェイトも一角との闘いで既に体力を使い果たしていたからだ

一角も息が乱れてはいるがフェイト程ではなかった。フェイトは腕は確かだが体力を比べると一角よりも劣っていたのだ

「テメエ、名前は・・・？」

「は？・・・」

いきなりの一角の問いにポカンとするフェイト

「名前だよ名前！あんだろ」

「ふえ、フェイト・テストロッサ・ハラウオン・・・」

困惑しながらも答えるフェイト

「そうか・・・一応覚えとくぜ」

そう言いつつ一角は空中に霊圧を固めた足場を作ってその場を立ち去った

それを見ていた弓親は

「よかったね」

「・・・何がですか？」

「名前を覚えられたっていうことは一角のお気に入りになれたって事だよ」

「・・・」

「また会う事があつたら闘ってあげてね。一角も喜ぶだろうから」

そう言いつつ弓親も瞬歩で立ち去った

それまで二人の闘いを見てずっと固まっていたティアナとスバルが
フェイトに駆け寄ってきた

「フェイトさん!!」

「大丈夫ですか!？」

フェイトはうんと首を縦に振笑顔で返した

「悪い人ではない・・・の・・・かな？」

「「え?」」

フェイトの呟きがリニアールに残った

第六話 会話（後書き）

日番谷達が管理局側につくのは何時になることやら・・・

第七話 破面（前書き）

ふう
・
・
・

第七話 破面

なのはは現在部隊長室の前に居た

扉の前で立ち止まり数秒置いてドアノブに手をかける。扉を開くと中には数人の人影があつた

機動六課の部隊長であるはやて、そんな彼女のユニゾンデバイスのリンフォース、そしてはやての守護騎士、シグナム、ヴィータ、シャル、ザフィーラの四人

フェイトも既にシャルの手当てを受けて部隊長室へ居合わせていた

「みんな・・・ごめん・・・レリック取られちゃった・・・」

明らかに意気消沈しているなのは

「しゃあないなのはちゃん。それにこれはうちの責任や、黒服に対して完璧に油断しとつた。」

はやても苦い顔をして責任は自分にあると言い張る

「仕方ないよ・・・とても強かったから・・・あの人達」

「フェイトちゃん、大丈夫なの？」

現在フェイトの体には何箇所か包帯が巻かれている。なのはがそんなフェイトの姿を見て心配そうに問い掛ける。

「大丈夫だよ、なのは」

フェイトもなのはが心配しないように笑顔を作り答えた

「主はやて、今はそんな事よりも急速に対策を立てなければなりません」

「そーだぜ、敵に持つてかれたレリックを取り返さねーと」

部屋の隅に居たシグナムが一步前に出て進言した。ヴィータも同調するようにはやての座っている机に身を乗り出して言う

「そやな・・・悩んでも仕方あらへん。なのはちゃんフェイトちゃん、黒服と闘ってなんか分かった事ないか？」

はやては黒服達と交戦したなのは達に何か情報がないかと聞いてくるはやて

「私が闘った子・・・冬獅郎君って言うんだけど、その子が言うにはあの人達は死神って言うんだって」

『・・・・・・・・』

その場にいる全員が黙り込んだ

「なのはちゃん・・・今なんて言った？」

「にやはは・・・やっぱりみんな驚くよね・・・」

苦笑いを浮かべながらも日番谷に聞いた事をそのままはやて達に伝えた。はやて達も度々驚愕の表情をしながらもなのはの話しを真剣に聞いていた

「そうか・・・ほんならその朽ちた魂を尸魂界に導くのが死神の仕事ちゅう訳やな」

「うん、そうみたい」

するとフェイトが自分が闘った死神について話しだした

「でも私が闘った人達は魂を導くって言うよりも叩っ切るって感じだったけど・・・私もボロボロにされちゃったし」

「テストロッサを此処まで追い詰める相手か・・・」

シグナムが不敵に笑う。それを見たヴィータがまたかと嘆息をつく。バトルマニアのシグナムにとっては一度は闘ってみたい相手のようだ

「で、でもそんなに悪い人達じゃないと・・・思う」

「それは私も思ったかな」

すると今まで黙っていたザフィーラが腕を組みながらなのはに問いただした

「一つ腑に落ちない、では何故その死神達はレリックを狙う・・・」

「解らないけど、冬獅郎君が言うには霊圧がとても大きかったみたいだよ」

「霊圧？」

「多分私達で言う魔力の事だと思う」

なのはも確信が持てた訳ではないので少し自信なさ気に答える

「危険な物だから尸魂界に持ち帰るって・・・」

「そうか、では持ち帰られる前に一刻も速くレリックを回収しましょう」

シグナムがはやてに向かって進言した。その目にはレリックを奪われた焦りと闘いたいという好奇心の二つが混じり合っている

「ま、バトルマニアのシグナムは置いといて、私も速く取り返した方がいいと思うぜ」

ヴィータもシグナムの意見に賛成のようだ

「はやてちゃん、その前にもう一個の件について」

「せやった！すっかり忘れてたわ」

はやてが忘れていたもう一つの件についてシャマルが説明をし始める

「実はなのはちゃん達が死神達と闘ってる間に一人男の子を保護したの」

「男の子？」

なのはとフェイトが疑問を浮かべる

「ええ、倒れてる所をシグナムが見つけてそのまま連れて帰って来たの。随分体が冷え切っていたから直ぐに治療して今寝かせてあるわ」

「その男、頭の横に仮面みたいな物をつけていた・・・剣も持っていたのでこちらで没収したが・・・」

シグナムが一息溜めて話し出した

「どうも死神と何か関係がありそうではない」

「・・・じゃあ少し様子見て来ようか」

「じゃあ私も行こうかな・・・」

なのはがそう言つとフェイトも便乗するように答える。

「じゃあ様子見てくるね」

そう言つてなのはとフェイトは女の子が眠る診察室へと向かった

「あ、ぐっ」

とある部屋で一人の男が目を覚ました。その表情は苦痛に満ちている

「はぁはぁ・・・ここは・・・」

そこで男は全てを思い出す。自分が死神と闘っていた事、小さな隊長とを倒したと思ったら反撃されて凍り漬けにされた事、そして何が光りだし気を失った事

「あの糞餓鬼があー！ー！！よくも、よくもこの僕をー！ー！！！」

日番谷の事で怒り狂い我を忘れて怒鳴り散らす男

この男こそ死神の天敵であり日番谷達と一緒にこの世界に捨てられたルピだった

「あのチビ！！次会ったら絶対に殺す！！」

しかし捨てられたとを知らないルピは愛染よりも日番谷の事しか頭になかった

するとそこへ

「どうしたの!？」

なのはとフェイトがルピの絶叫を聞き慌てて駆け付けて来た

「君、大丈夫? 何処か痛いのか?」

フェイトが優しく問い掛ける。しかしルピは突然現れたなのはとフェイトに警戒心を剥き出しで喋り返す

「おねえさん達、誰・・・」

「私達は時空管理局の者です。だから警戒しないで。」

「君が倒れてるところを保護したんだよ」

「時空管理局・・・?」

そう言いながら改めて周囲を確認する。どうやら何処かの病室だと気付いたルピ

「君、どうしてあんなところに倒れてたの」

なのはの質問を聞き流し逆にルピがなのはに質問した

「おねえさん達、人間?」

いきなりのルピの質問にポカンとするなのはとフェイト。しかし質

問を無視する訳にもいかないので「そうだよ」と答えた

「ふーん・・・」

なのは達は突如何かを考え込むルピを見て

《フェイトちゃん、やっぱりこの子も・・・》

《うん、黒い着物は来てないけど、死神の関係者の可能性が高いね・・・・》

念話でそんなやり取りをしていた

一方ルピの方は

（どうして只の人間に僕が見える・・・見たところ死覇装は着てないから死神ではないようだしい）

普通ルピのような破面は人間には見えない存在、しかし目の前の二人は自分の事が見えている。その事が不思議でならない

（ま、いつか。見えてるなら見えてるで殺せばいい）

そんな事を考えながら自分の脇にあるはずの斬魄刀に手をのばすが

「あれ？」

何時も自分の脇にあったはずの斬魄刀がない

「僕の斬魄刀がない!？」

「安心して、君の刀は私達が預かってるから」

フェイトがそう言うのとルピは二人を睨み付ける

「返せ！！」

ルピがいきなり怒鳴った事で驚くのは達

「お、落ち着いて。預かってるだけだから」

「ちっ！！」

ルピは軽く舌打ちをする

（くそっ面倒くさい！！とつとどこいつら殺して斬魄刀探しに行こう。斬魄刀がないと手が汚れるから嫌なのに！！）

油断しているのはとフェイト、ルピが少し本気を出せばおそらく一瞬で殺すことができるだろう

「ごめんね、後で必ず返すから。ところで君に聞きたい事があるんだけど・・・単刀直入に聞くね」

ルピはなのは達の言葉を聞きもせず手に力を加える

そして胸を貫こうと思えばベッドから立ち上がるが

「君って死神なの？」

その言葉でルピの動きが止まった

「何で死神の事・・・知ってるの？」

なのはの問いにただ立ち尽くすルピであった

第七話 破面（後書き）

いや〜ルピを管理局に入れてしまった。

第八話 陰謀（前書き）

なんか最近しんどいな・・・

第八話 陰謀

「なんで死神の事・・・知ってるの？」

「やっぱり君も死神の関係者なんだね!!」

「質問に答えてよ・・・殺すよ」

「!!」

ルピから急に発つせられた巨大な霊圧に怯むのはとフェイト

「それを言うなら先に質問したのはこっちだよ。先にこっちの質問に答えて・・・」

ルピの発つしている巨大な霊圧を受けながらも屈する事なく言い返すのは

「・・・おねえさん達、そんなに死にたいんだ・・・」

ルピはそう言うと言腕をなのは達に向けて上げる
するとルピの手の先から赤い球体のようなものが収束されていく

「「!?!」」

それに驚き直ぐさま対処しようとするが、その時

「ちょっと待ちい!!」

病室のドアが勢いよく開けられた

「質問には答えたるから此処で暴れるのは止し!!」

はやて率いるヴォルゲンス達がいた

質問に答えるという事で虚閃の集束を中止するルピ

そしてさっきまで自分が寝ていたベッドに腰を降ろした

「・・・じゃあ早く教えてよ」

「その前に約束や、こっちが答えたらそっちもちゃんと答えるんやで!!」

「ああ、いいよ」

勿論嘘、ルピは聞き出せるだけの情報を聞き出したらさっさとなのは達を殺して斬魄刀を探すつもりだった

「じゃあ答えるね」

なのはが代表して言う事になった

「私達が死神について知ってるのはさっきその死神と闘ったからだよ」

「闘った？」

「うん、四人組の死神で私達負けちゃった」

ピクッ

四人組という言葉に反応するルピ。そして気になる事を聞く

「その死神の特徴は・・・」

「私が闘ったのは銀髪の子供だったよ名前は冬獅郎君」

—— 銀髪の子供 ——

「・・・何処でそいつと闘ったの？」

ルピの顔は次第に怒りに変わっていった

「リニアレールでけど・・・知ってるの？」

ルピはそいつを知っていた

直ぐにでも飛んで行って殺したい気分だったが今ルピは本調子じゃない。先の闘いで死神にやられて今闘っても勝てるか解らないのだ

（どうするかな・・・）

ルピは考える。どうすれば日番谷達を酷く殺せるか

「君？どうしたの？」

なのはが急に固まったルピを見て心配そうに声をかける。そしてルピはなのは達の方を見て

笑った

「いいよ次は僕の事について話して上げる」

ルピはいきなり自分の事について話し出した

「おねえさん達死神について知ってるなら虚って知ってる？」

「虚？知らないけど・・・」

ルピの問いに答えるなのは

（しめた！！）

ルピは心の中で笑った

なのは達が虚について知っていたら今ルピが考えている事が実行出来ないからだ

「僕はさ、虚って言う種族なんだ」

「だからその虚って何なんだよ！」

少し口調を強めてルピに向かって言い放つヴィータ。ルピも少しむかつきたので言い返した

「うるさいなあ今から説明するんだから黙ってなよ、オチビさん」

「なっ！てめえ！！」

「ヴィータ、黙るとき」

売り言葉に買い言葉の要領で言い返そうとするがはやてによって止められる

「虚ってというのは魂をあの世界に送る仕事をする種族なのさ・・・」

「え！？でも死神も魂を尸魂界に送るって・・・」

「あのさぁ・・・尸魂界がどういう所か知ってる？」

ルピはため息をつきながら、内心は面白そうに笑って話しを続ける

「地獄みたいな所だよ・・・連れて行かれた魂は死神達の玩具にされる」

「玩具？」

「毎日奴隷に使われたり実験に使われたり・・・それに死神の主食って知ってる？」

その言葉に一同は首を横に振る。それを見たルピは笑いながら言った

「魂だよ・・・」

『!?!』

なのは達一同は驚愕の表情を浮かべる

「それに比べて僕達虚は虚圏という所に連れていく」

「虚圏？」

「尸魂界とは真逆も真逆、天国さ・・・」

ルピの説明を聞いていたなのは思っていた事を口にする

「でもそんな事する人には見えなかったけど・・・」

「見えないから怖いのだ・・・僕がさっき倒れたのもおねえさん達が闘った死神達に殺されそうになって命からがら逃げてきたんだよ」

「え!?!」

「・・・どういう事が教えてくれへんか？」

ルピが死神に命を狙われていた事を聞いたはやての顔は一層険しくなった

「虚は死神達によつて滅ぼされたんだよ」

『滅ぼ・・・された』

全員の顔が驚愕の表情に変わっていく

「そう、だから僕も死神から命を狙われてる訳・・・」

ありもしない嘘を次々と並べていくルピ。なのは達はそれを真剣な表情で聞いている

そんな中シグナムがルピに問い掛けた

「滅ぼされた虚という種族はもうお前だけなのか？」

「あー・・・そうだよ」

ルピは予想外の質問に適当にはぐらかしたつもりだったがシグナムはそれを答えにくい質問をしてしまったと勘違いした

「要らぬ事を聞いたな、すまん・・・」

「でも、何で滅ぼされちゃったの」

フェイトが先程から気になっていた事を聞く

「さあね、魂を独り占めしたかったんじゃない？」

「酷い・・・」

「さっきおねえさん達を攻撃しようとしたのも、おねえさん達が死神について知ってたからつい仲間なのかと思ってね」

「そうなんだ・・・」

ルピを同情するように悲観するなのは達

そんな視線にうざいと思いながらもルピは口には出さず話しを続ける

「そついえばおねえさん達何で死神と闘ったの？」

ルピはふと思った疑問を問い掛けた

「・・・レリックっていう大切な物を盗られちゃったんだ・・・」

なのはは少し恥ずかしそうに俯きながら答える

ルピは面白そうに笑って

「じゃあ速く追い掛けた方がいいね、死神の手に渡ったらどんな事に悪用されるか解らないよ」

『！！』

なのは達の顔が一瞬で陰しくなる。もしレリックが悪用されたらと思うともうじつとしてはいれなかった

「なのはちゃんフェイトちゃん、直ぐに出動準備や」

「うん」

「わかった」

「今回はシグナム、ヴィータ、ザフィーラにも出て貰う。シャマルはみんなサポートや」

「はい」

「当たり前だぜー!!」

「心得た・・・」

「了解よ」

「今回は相手が相手やからFW達は見学や」

はやてが的確に指示を出していく

フェイト達も直ぐ準備しようとする中なのはが

「そつえば君の名前聞いてなかったね・・・教えてくれる?」

「・・・ルピ」

「ルピ君だね、私は高町なのはだよ。今は忙しいからちゃんと自己紹介出来ないけど終わったらちゃんとみんなで自己紹介するから」

ルピは頷きめせずにじっとなのはを見ている

「それとこれ」

そう言ってなのは何処からともなく取り出した斬魄刀をルピに返した

無言で斬魄刀を受け取るルピ

「じゃあ行ってくるね、怪我が直るまでちゃんと寝とくんだよ!」

そう言い残してなのは出ていった

ふふふ

突如ルピは笑いだした

ふははは

狂ったように

全てルピの作戦通りとなった

なのは達に死神は悪だと思い込ませ敵対状態にもっていき戦わせる。

そしてなのは達と闘って疲労しきっている日番谷達をなぶり殺す。
その後なのは達も殺す

死神を殺せてなのは達も殺せる・・・そして楽しめる

まさに一石三鳥

それこそがルピの考えた作戦だった

「待つててよ小さな隊長さん」

ルピは不適に笑う

「次こそは君の小さな頭、ネジリ切って潰してやるからさ!!」

そう言つてルピはひたすらに笑った

第九話 戦力

「さて、どうするか・・・」

日番谷と松本はなのは達からレリックを奪った後そのまま一角、弓親と合流しリニアールから大分離れた丘にいた。

移動している途中に塔など、建物が沢山建っている都市のようなものが見えて、松本が寄って行きたいと駄々をこねた時は弓親や一角の説得に十分くらい抵抗したが日番谷に「寄ってく代わりにその分のデスクワークを増やす」と言われて諦めていた

そのまま丘に着いた日番谷達はどうか尸魂界に帰る方法を探していたのだが・・・

「隊長おゝ解鍵も出来ません」

尸魂界に帰る手段が見つからずどうするべきか迷っていた

レリックを手に入れたのは良いが尸魂界に帰る手段がないのでははどうする事も出来ない

「それにしても・・・」

日番谷はそのままレリックから一角の方へ視線を移し

「随分と酷くやられたな・・・斑目」

傷だらけの一角を見て軽く呟いた

「こんなのかすり傷ですよ、唾つけときや治ります!」

と言いながらも唾ではなく斬魄刀の柄頭に仕込んであった血止め薬を使う一角

かつて一護や射場との戦いで使った血止め薬である

「大事がないならそれでいい。今この訳の分からない状況で戦力を失うのは「あー、一角なにそれずるゝい」・・・」

松本に横槍を入れられる日番谷、その表情は不服そうだ

「血止め薬だよ!お前には見せた事あんだろ」

「ないわよ!初めて見たもん。いゝな、私も化粧品のクリームとか容れてみようかしら」

「いや乱菊さん・・・そういう使い方はちょっと・・・」

乱菊に向かって冷静につっこむ弓親

ただ一人黙っている日番谷は松本達からレリックへ視線を移した

一刻も早くこのレリックを尸魂界に持って帰り、何らかの処置を施す必要がある

しかしそのための帰る手段がない。いつもは普通に使っている解鍵
さえも開かない

(・・・)

日番谷は考える

此処には自分達が知らない物が沢山ある

見たことのない木の実、魔法使い、町並み、レリック

これら全てがこの今日という一日の間に自分の前に現れた

これはつまり・・・自分達の知らない世界

(異世界・・・?)

日番谷の頭の中にそんな言葉がよぎった

(可能性があるとすればあの第六十刃と闘った時・・・)

日番谷達がルピを氷漬けにした後、急にルピから光が溢れ出しそれに巻き込まれた

あれが何かは解らないが少なくともあの後自分達は気を失ってしま

った

（考えすぎか・・・？）

そう私案していると後ろから声をかけられる

「そついえば日番谷隊長達の限定解除ってどうなってるんですか？」

「ん？ ああ・・・」

ふと気になったのか弓親がそんな質問をしてきた

弓親と一角は席官なので元から霊圧限定の刻印は施されていないのだ

「一回目の破面との闘いで奴らの強さが予想を超えていたからな、俺が限定解除の常定申請しておいた」

組んでいた腕を解いて地面にある石に腰をおろす日番谷

「それでも少し手こずった・・・破面といい魔法使いといい気が抜けねえ相手だぞ・・・」

「はい・・・一角と闘った相手も明らかに副隊長以上の実力がありました。放出される霊圧だけなら隊長クラスに匹敵するかと」

「こつちもそんな感じだ・・・」

日番谷は自分が闘った相手を思い出して言った

高町なのは・・・女性があれほどの力を持っているのだ、それもたった二十歳位の女性が

死神は長く生きられる、日番谷もまだ子供だが年齢でいうならなのはよりも上だろう

時空管理局にはあれほどの力を持つ者がいたいどれほどいるのだろうか・・・

日番谷が危惧の念を抱いくのは当たり前の事だった

「ともかくこのレリック、尸魂界に持ち帰る訳だが帰る方法が見つからない以上どうしようもねえ」

日番谷が何か思いついたように喋り始めた

「だから先程通りかかった町で何らかの情報を手に入れたい訳だが・・・」

その瞬間松本の目が光りただ一点、日番谷のみを見続けている

日番谷もそれに気付き松本の方を見るが直ぐに弓親の方へ向き直し

「松本と俺は此処でレリックを見張っているから綾瀬川と斑目で行って来てくれ」

「ええーーーーー!!」

その言葉を聞いた松本は不満があるのか大声で抗議し始めた

「隊長！！なんで一角と弓親なんですか！！。私でいいじゃないですか！！。」

「お前が行ったらお前にとっての有益な情報しか手に入れてこねえからな」

「そんな・・・」

過ごすショックを受ける松本に対して実に素っ気ない日番谷

松本はそれでもなお抵抗のそぶりを見せようとする

「で、でも今この状況ならなるべく目立たなくするのが定石ですよ
ね？」

「それがどうした・・・」

「弓親はともかく一角は駄目じゃないですか！！ハゲだし見た目怖いしハゲだし・・・絶対注目浴びますよ！！。」

「おい松本・・・今ハゲって二回言わなかったか？」

実際ハゲの頭に青筋を浮かべながらゆっくりと斬魄刀を抜き取ろうとする一角

「バカヤロウ、お前が行ったらそれ以上に注目される行為をするだろうが」

「いや、それ以前に死覇装着で斬魄刀持ってたら普通に注目されま
すよ」

先走る松本と日番谷に当たり前の事を言う弓親

すると

《……!!》

日番谷達に微かだが段々と大きくなる何かが近付いていく

それを感じとった日番谷達の顔は先程とは違い、険しい表情に変わ
っていた

現在なのは達は移動中である。メンバーはなのは、フェイト、それ
にシグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマルの六人で移動してい
た。

はやては日番谷達が持っているレリックを頼りに日番谷達の居場所を捜す為、シャーリー達と一緒に行動している

そんな中不意にシグナムがフェイトに問い掛けた

「テストロッサが闘った相手の特徴を教えてください」

「特徴ですか・・・」

少し上を向いて考えるフェイト。そして直ぐに思い出したように言った

「・・・ハゲてました」

「ハゲか・・・わかった。聞いたなハゲは私が相手をする」

「はいはい、ハゲはシグナムね。私はなのはからレリックを奪った奴をボコボコにしてやる」

シグナムは一角、ヴィータは日番谷と闘うことを決めていた。

「でも油断はしちゃだめよ。なのはちゃん達をあしらえる程の相手なんだから」

「わかってるよ。シャマルは心配し過ぎなんだよ」

ヴィータ達が話しているとはやてからなのはに連絡が来た

《なのはちゃん。死神の居場所がわかったで！！今から言うところに

向かってや》

「了解。みんな、死神達の居場所がわかったよ」

「まだ尸魂界という所には帰られてなかったな」

日番谷達がまだ尸魂界に帰っていなかったことにホッとするシグナム

「じゃあ行こう・・・レリックを取り戻しに・・・」

「うん」

そう言うと魔法使い達は死神達に向けて空を駆けた

代十話 再戦 弐（前書き）

いつもよりちょっと早い更新!!

代十話 再戦 弐

「またデメエ等か・・・」

今、日番谷の目の前にはなのは達がいた。その人数は六人、しかもその全員からそれ相応の霊圧を感じる。

それに比べて日番谷達は四人しかいない。しかもルピとの破面戦の時から録に休めてもいない

戦局は明らかに日番谷達が不利な状況であつた

「君達にレリックを渡す訳にはいかないからね」

そう言うとなのは率いる魔法使い組はデバイスを構えた。それを見た日番谷率いる死神組も斬魄刀を鞘から抜き取り構える

《松本、斑目、綾瀬川・・・》

《なんですか、隊長》

《相手の人数がこちらよりも多い、一、三人は俺が相手をするから残りの連中はお前等でどうにかしろ》

《隊長、大丈夫ですか？》

《誰に聞いてんだ・・・伊達に隊長やってねえよ、それよりも自分の心配をしろ》

そう言っていると日番谷は斬魄刀を深く握り絞めて睨むようになのは達を見た

なのはもいつもと雰囲気の違い日番谷達に敵意があるように睨みつけている

「一つ聞いていいかな・・・」

唐突になのはが喋り始めた

「・・・何だ」

「君達はレリックを持って帰ってどうするつもり」

「・・・危険な物だから・・・封印する」

たとえ会話中でも僅かの隙も見せずに答えていく日番谷

「本当にそれだけなのかな・・・」

「・・・なに？」

「聞いたよ・・・君達の事・・・」

その言葉に日番谷は眉を潜ませた

確かに日番谷は自分達死神についてある程度の事は説明した。しかしなのはの口から出た言葉はまるで自分達以外から聞いたような口ぶりだったからだ

「聞いた？・・・誰にだ・・・」

そう聞かれたのははこの名前を出すか迷っていた。もしも虚の生き残りがいると死神に知れたらルピの身に危険が及ぶかもしれない・・・ルピを危険な事に巻き込みたくはないと考えていた

しかしなのは・・・

「虚だよ・・・」

はつきりと答えた

それはまだ自分の心の隅の何処かで、日番谷が・・・死神がそんな事をするはずがないと信じていたからである

しかし

「その名前・・・誰に聞いた・・・」

途端に日番谷から放たれる大量の霊圧

その霊圧を直に受けたなのは

（ああ・・・）

なのは抱いていた淡い希望は音もなくぐずれ落ちた

日番谷は少し動揺していた。

なのはの口から出た虚という言葉、しかし日番谷は虚についてはなのはに説明していない。では何故知っているのか。

「その名前・・・誰に聞いた・・・」

隊長である日番谷はその膨大な霊圧をなのは達に向けて放ちながら半ば強引に問い詰めた

（まさか・・・）

日番谷の頭の中にある一つの可能性。いや、たった一つしかない可能性

それはまさしく自分達と一緒に光に包まれた《第六十刃》ルピ

ルピがもし時空管理局と接触しているならば・・・

接触した奴は殺されるかもしれない。魔法使いといえど人間だ、殺させる訳にはいかない。他にも可能性としては低いが時空管理局が破面と手を組み自分達に敵対するという事も考えられる

どちらにしてもろくな事にはならない

「答える・・・誰に聞いた・・・」

じつとなのはを睨みつける日番谷

すると

「もついい、高町・・・」

その言葉を発つしたのはシグナムだった

「あの男の為にも今はこいつらを捕まえる事だけに集中しろ」

「・・・」

口を紡ぐなのは

「あの男？そいつは・・・」

日番谷が口にしようとし瞬間日番谷の目の前に何かが突っ込んできた

途端日番谷は喋る事をやめて斬魄刀でうける。その瞬間ガキーンという音が
鳴り響きそのあまりの力に後ろに引きづられてしまう

見ればそれは槌のような武器でそれを扱っているのは小さな子供

「!？」

見た目とは違いかなりのパワーを持っている目の前の子供に驚く日
番谷

その子供の名は

「ヴィータちゃん!!」

鉄槌の騎士ヴィータであった

「テメエがなのはからレリックを奪った奴だな」

鏝ぜり合いの状態のまま日番谷に問い掛けるヴィータ

「・・・だったら何だ」

「ぶっ殺す!!」

そう言うヴィータは距離とりもう一度日番谷目掛けて自分のデバイスであるグラフ・アイゼンを振りかぶった

「隊長!!」

それを見ていた松本は直ぐに加勢しようとするが

「行かせん・・・」

「!?!」

守護獣であるザフィーラによって阻まれた

「何よ、あんた・・・」

「我が主、八神はやての騎士が一人、ザフィーラ」

「そう、あんたが私の相手って訳・・・」

そう言うのと斬魄刀を構える松本

「では・・・参る」

こちらでも激しい轟音が鳴り響いた

「俺の相手はテメエか・・・」

今一角の目の前にはピンク色の髪をポニーテールでくくって、右手にはデバイスであるレヴァンティンを持ったシグナムがいた

「ふむ、テストロッサの情報通りだな・・・」

照り輝く頭部を見てそう呟くシグナム

「いや、何でもない。貴様の相手は私だ」

「前線に出て来るくらいだからあちつたあ強いんだろうな」

挑発のつもりか、それともただの興味本意なのか一角が聞いた

「少なくとも純粹な剣の腕だけならテストロッサよりも上だと言っておこう」

「テストロッサ？あの金髪の女が」

自分が苦戦した女、フェイト・テストロッサ・ハラウオン、今目の前にいる女はそいつよりも上だと言った

「そいつは良かったぜ・・・じゃあ早速いくぜ」

そう言うといつものように右手に鞘、左手に斬魄刀を持って構える一角。それに合わせてシグナムも構えをとる

「護廷十三隊更木隊第三席、斑目一角だ」

シグナムは少し驚いたような顔をして

「名乗るのだな・・・お前達死神でも・・・」

「俺の流儀だ、殺された奴の名前くらい知って死にたいだろうからな」

レヴァンティンを持つ手に少し力が入るシグナム

「ほう、つまり私は貴様に殺されると・・・」

シグナムの問いに対して一角は返事をしない。それをシグナムは肯定ととり

「・・・舐めるな!!」

一瞬で一角の前まで移動しレヴァンティンを振るう

「!?!」

間一髪斬魄刀で受け止めた一角

「ならばこちらも名乗っておこう」

鏝ぜり合いのままシグナムは言った

「我が主、八神はやての騎士が一人！！烈火の将、シグナムだ！！」

「君が僕の相手だね・・・」

対して弓親の前に立ち塞がるのはフェイトであつた

「あなたたちは・・・どうして・・・」

悲しそうな表情で弓親を見るフェイト

フェイトもなものは同様死神達を信じていたのでそのショックは大きかったのだ

「さあね、そう言うのは日番谷隊長に聞いてよ・・・それよりも今は」

ゆっくりと斬魄刀を構え霊圧を研ぎ澄ましていく弓親

「この再開と闘いを楽しもうよ」

そう言う弓親はフェイトに向かって駆けた

今此処に、魔法使いと死神の闘いが始まった

第十一話 再戦 式

「凄い・・・」

そう呟いたのはエリオ

「隊長や副隊長達と互角に渡り合ってる・・・」

今現在FW陣はモニター越しに闘いを見ている

「あ、危ない!!」

「あれ？いつの間にか移動してる・・・」

見た事もない闘いに目が離せないFW陣一同
その大半の動きは早過ぎて見えないのだが、それでも目に焼き付け
ようと必死にモニターを凝視する

「何？あんた達あれが見えるの？」

「んゝかろうじて見えるかなあ。あ、でも振るってる刀が少し見えるくらいだよ」

「僕もそんな感じですよ」

「うゝ私は全く見えません」

「いいのよキャラ。あんなに見えるのは野生生物だけだから」

そう毒づくティアナにスバルは《酷いよティアゝ》と嘆く

その中でキャラがある事に気付いた

「あ、エリオ君。あの金髪の女の人だよ。私達が落ちた時に助けてくれたの」

「あの人が・・・やっぱり死神だったんだね」

「うん、ちゃんとお礼言いたかったのに・・・」

「・・・そうだね」

悲しそうに俯くキャラ、そんなキャラに声をかけてやれないエリオ。ただお礼を言うだけなら死神達が捕まった後に面会でもして言えばいい

しかしその面会ができないかもしれないと八神部隊長からエリオとキャラは聞いていた

《どうしてですか》

とキャラが聞いたがはやては明確な答えは言わないまま《詳しい事は闘いが終わった後でな》と言い、そのままFW陣に出動待機命令だけを残して行ってしまった

腑に落ちないまま歩くFW陣達。そんな中医務室の前である人物と出会う

「なんだ・・・あのおねえさん達けっこう強いじゃん」

それがこのルピだった

「ルピさん。寝てなくて大丈夫なんですか？」

「あゝうん」

ルピは声をかけたエリオの方も向かずに答える

「ねえ、おねえさん達が使ってるあれ、何ていうの」

「あれ？魔法の事ですか？」

「魔法？」

「はい、魔法です」

そう言いエリオは魔法の事について説明し始める

「魔法とはリンカーコアという魔道師が持つ魔力の源から放出される力みたいなものです」

「ふーん」

そう素っ気なく答えるとルピはまたモニターに顔を向ける

（僕達が使っ霊力とあまり変わらないかな・・・）

「ねえティア、ティア！！なのはさん達がおしてるよ！！勝ってるよ！！」

「大声出さなくても分かってるわよ」

隣から聞こえてくる大きな声そのハイテンションなスバルを見て不快な気分になるルピ

「もう、五月蠅いなあ。なに？君達あのおねえさん達がそんなに好きなの？そうゆう趣味なの？」

「あ、すみません。でもなのはさん達が活躍すると自分の事みたい嬉しくって／＼／」

少し顔を赤らめながら答える

「・・・尊敬してます、凄く。私の目標だから・・・」

モニターに写っているのはを見ながら真剣に答えるスバル。そのスバルをみたルピは

「ふふ・・・」

笑った

しかしその笑みは嘲笑うかのような不適笑みで

（作戦へんこつ）

ルピの予定をより残酷なものに変更させた

（やっぱりこいつらは殺さない）

こいつらとは現在モニタールームにいるFW陣のことである

ルピは元々なのは達を殺す前にスバル達やこの艦にいる全ての人を殺すつもりだった

しかしスバルが尊敬しているというなのはを殺したらどうなるだろうか・・・

怒り狂って自分殺しにくるだろうか

そう考えたルピは先になのは達を殺す事を決めた

するとモニタールームを出て行こうとするルピ

「あれ？ルピさん何処行くんですか？」

「少し気分が悪いからね、休んでくるよ」

「あ、はい。ゆっくり休んでください」

そのままモニタールームを出たルピは医務室とは逆の方向に向かって歩き出し

「あは、ホントに、ホントに気分が良くてさ・・・」

笑いが絶えないルピ

「今なら魔法も使えそうだよ」

そう言っつてルピは艦から姿を消した

＊＊

s i d e シグナム

「こいつ・・・」

「ひゃっはああああ」

こいつ、なんて奴だ

シグナムは闘っている相手、一角を見て思った

目の前のこいつと闘ってわかった。こいつに型という型はない。一つ一つ繰り出される攻撃はまるで素人の喧嘩を連想させる。自分の

方が剣士としての実力が上だという事もわかる

しかしなぜ

なぜ私はこいつにおされている!!

「おらおらぁどうした?」

「くぅ!!」

次々と繰り出される怒涛の攻撃、それを弾いて反撃する

「はぁ!!」

一角という男の肩に当たり肩から血しぶきが飛ぶ

「らぁ!!」

すかさず反撃が来るのを紙一重でかわし攻撃を加れる。そんな攻防をもつ何回繰り返しただろう・・・

「おらあー!!」

まだだ

こいつはいくら傷ついても切り返してくる。私もそれなりに傷を負っているがこいつはもつと酷い、あちこちから出血している。そんな状態で動きが鈍くなる訳でもなく、いや、段々速くなっている気さえする

「貴様、何故そこまで捨て身で攻撃できる!!」

「ああ？」

「私の攻撃がいくら非殺傷設定とはいえ運が悪ければ本当に死ぬかもしれないんだぞ」

私はイライラしていた

この男、命を何だと思っている

「ああん？非殺傷設定？」

男は怪訝な顔をしてこっちを見ている

「そうか、そんじゃあすぐにその非殺傷設定ってやつも解除させてやるよ」

「貴様っ！！」

私は怒りの余りつい怒鳴ってしまった

「命を何だと思っている！！」

男は何の気無しにこちらを見ている。反応しないところが気に食わない

ところが男から返ってきた言葉は

「命命って五月蠅え野郎だ・・・」

「なに」

「そんなに命が大事なら戦場に出て来るんじゃない！！」

男が怒鳴るように叫んだ

「な！？私は貴様の命をあんじて――」

「まだ解らねえか、それが余計なんだよ」

解る？解る訳がないだろう。そう思っていた

「いいか、闘いに出る奴はどいつもこいつも皆命懸けで戦う」

こいつの言つ事を聞くまでは

「そんな中で敵に命の心配される事は戦士として最大の侮辱だ」

言われて気付いた、というより思いだした

ああ

私は

私は侮辱していたのだ

目の前の戦士を

私もかつてはそうだったではないか、一つ一つの闘いに命を賭けて挑んでいた。どんな相手にも全力で、決して手を抜かずそれは主の為というのもあったがなにより自分の騎士としての誇りのためでもあった

それをこいつは思い出させてくれた

「そうか、先程私がおされていたのも私の覚悟が足りなかったという訳か・・・」

「・・・謝らなければならないな」

そう言い私は構えを解き

「済まぬ・・・」

頭を下げた

「それと」

頭を上げ男の目をしっかりと見て

「礼を言つ、これでまた私は騎士として闘える」

堂々と言い放った

「やっと気付きやがったか・・・」

男はさっきまでとは違つ構えをして言った

「じゃあそろそろ俺も全力でいくぜ!!」

全力?この俺は今まで全力ではなかったのか?

そんな疑問が浮かび上がる中男が大声でその言葉を言い放った

「延びろお！！鬼灯丸！！」

男が刀と鞘を合わせた瞬間、刀と鞘が一つになり槍になった。しかしそれだけではない、男から感じる霊圧と言うのも先程より上がっている。おそらく身体能力も上がっているだろう・・・

「流石だな・・・テストロッサが貴様に遅れをとるのも頷ける」

この男とも

「私も迷いは消え、覚悟を決めた」

敵同士でなければ

「斑目一角、貴様を殺すつもりでいく」

どれほどの友になれたらどうか・・・

「はあああああ
「

その思いを胸に私は最後の一撃を彼に全力で叩き込んだ

第十一話 再戦式（後書き）

一角VSシグナムでした

次回は誰にしようかな？

第十二話 再戦 参

「凄い音・・・」

フェイトが顔を向けた先にはちょうど一撃を放ったシグナムと一角だった

「ハッ・・・ハッ・・・」

見れば弓親は苦しそうに呼吸をしている
身体は傷だらけで死覇装はボロボロ、戦局は明らかにフェイトのほうが優位な状況だった

「シグナムが放った技はおそらく紫電一閃・・・まともに喰らえばいくらあの人でもただでは済まないでしょう」

「・・・・・・」

弓親はただ黙って聞いている

「・・・シグナムは本気でした。下手をすれば死んでるかもしれないぐらいに」

「そうかもね・・・」

弓親は素っ気なく言った

「・・・心配じゃないんですか？」

「心配は・・・しているよ!!」

そう言うと弓親はフェイトに横から切りかかる。
フェイトはそれをバルディッシュでいなし、直ぐに受け流すようにして反撃に転じる

「はああ!!」

弓親はその回避し後ろに下がる。しかし

「ライティングバインド」

「!？」

突如弓親が着地した地面から魔法陣が浮かび上がり弓親の手足が魔力の枷で拘束される

「・・・フォトンランサー」

瞬間フェイトの周囲に出現していたフォトンスフィアから多数の雷の槍のような物が現れ、弓親に向かって降り注がれる

「くそっ・・・」

なす術もなく弓親は雷の槍に飲み込まれた

「・・・」

「ハッ・・・ハッ・・・」

煙が退いてまずフェイトの目に映ったのは手足を地面に付き四つん這いのような状態の弓親だった。電撃系魔法を喰らったせいか見れば先程よりも死覇装はボロボロになっていた

「あなたの負けです。降参して下さい」

「おあい・・・にくさま、僕達が負ける時は死ぬ時なのさ」

力が入らず斬魄刀を杖にして立ち上がる

「・・・どうしてそんなに死にたがるんですか？」

「別に死にたがってる訳じゃないよ」

「じゃあなんですか！？シグナムと闘ってたあの人もあなたも、どうしてそんな《闘い方》なんですか！！」

「・・・」

「あなた達みたいな闘い方は・・・嫌いです」

そう言うとフェイトはまた悲しそうな顔になった

「・・・優しいね」

「・・・」

「でもその優しさが命取りだよ」

そう言い斬魄刀を構える弓親

「咲け、藤孔雀・・・」

「!？」

弓親の斬魄刀が変形した事に驚くフェイト

「それは・・・」

弓親が持っていた斬魄刀は刃が幾重にも重なっていて丸い形になった

「そんな闘い方をする？ 違うよ、僕達はそんな闘い方しか出来ないんだ・・・」

「一角も、僕も・・・そういう形で生まれて、そういう風に育ってきた・・・」

自分の斬魄刀を見ながら過去を振り返るように呟く

「これが僕の斬魄刀藤孔雀。よろしく、フェイト・T・ハラウオン、それにバルディッシュだっけ？」

自分の愛刀である藤孔雀を構えて臨戦体制をとる

「いくよ・・・」

その言葉を聞いたフェイトは悲しそうな顔をしながら

「・・・やっぱりあなたは死神です」

バルディシュを両手に握りしめた

＊＊

「ガハア」

一角との闘いでの最後の一撃に紫電一閃を放ったシグナム地面に片膝をつき苦しそうに呼吸をする。その結果無傷という訳もいかず、

利き腕である右手が切り裂かれ結構な量の血が出ている

（危なかった・・・な）

右手を見て思った

（少しでも加減していたらこの右腕・・・失っていたな）

思わず苦笑してしまうシグナム

（しかしこちらの手応えはあった・・・あいつももう立てまい程の）
そう思考して自分と一角の治療の為に念話でシャルルを呼ぼうとしたその時

「——おい——」

後ろから声が聞こえた

慌てて振り返るシグナム

目の前に振り下ろされる刃、それを間一髪で避ける

半ば倒れ込む形で回避したシグナム、その顔には新たな傷が出来ていた

「——貴様ッ」

一角を睨み付けようとしてレヴァンティンを握るシグナム。しかし

「俺は——まだ——まだ——闘えるぜ——」

一角を見ると右肩から左の腰までザツクリと斬られている

「お前——」

「此処まで——やら——れ——たのは——いち、一護ん時——以来だな」

「喋るな馬鹿者——！自分の状態が解らないのか——？」

「俺——は——まだ——剣を——握っ——ガハア——握ってるぜ——」

一角はそう言うと鬼灯丸を振りかぶる

「だああああ——！！」

「チツ！！この大馬鹿者がああ」

シグナムもレヴァンティンを両腕で支えて迎え撃った

一角が持っていた鬼灯丸は音を起てて崩れていった

「――畜生――」

鬼灯丸が崩れ去ったのを確認した後一角もその場に崩れるかのように倒れた

「ハア・・・ハア・・・」

《シャマル、急いで来てくれ・・・私も相手も重症だ》

《わかったわ》

シャマルとの念話を終え倒れた一角の方を見るシグナム

「まったく・・・お前のような奴は初めてだ・・・」

こうして一角とシグナムの闘いは幕を閉じた

＊＊

（この感じ・・・一角の霊圧が段々・・・）

「アークセイバー」

「くそっ」

弓親は瞬歩でフェイトの攻撃をかわしながら少しずつ距離を詰めていく

「表情が変わったね。何かあった？」

「・・・別に、何もッ！！」

直ぐさま笑うように表情を隠す

「あなた、焦ってる」

「焦ってなんかいないさ」

焦りを顔に出さないように気をつけながらフェイトに切り掛かった

「プロテクション」

《p r o t e c t i o n》

しかし弓親の斬撃は魔法によつて防がれる

「まったく・・・いろんな技を持つてる・・・」

「あなたが焦つてる理由つてもしかしてあの人」

そう言いながら遠くで倒れている一角を指す

「・・・なんでそう思う」

「仲間が倒れたんです、心配するのは当然でしょう」

「・・・」

「それに感じるんです。あの子の何か段々小さくなっている・・・」

「!?!」

「このままじゃあの人・・・」

「——死ぬだろうね」

弓親が言った

「ッ！速く治癒させないと——」

そう言い一角の元に駆けようとするフェイト。しかし

「駄目だよ」

弓親が瞬歩を使って行く手を阻む

「！？」

「今は僕との闘いの最中だろう？行かせない」

「なっ！？私はあの人を助けようと「余計な事だよ」……え……」

「聞こえなかったかい？余計な事はするなって言っただよ」

フェイトは弓親の言っている事が理解出来なかった

「……仲間を助ける事が余計な事？」

「……」

「解らない。あなたの言っている意味が解らない……」

「僕は一角が死んだら君達を許さないよ」

「ッ！？なら——」

「でも一角を侮辱するような事はもつと許さない・・・」

真っ直ぐにフェイトの目を見ながら答える

「一角は敵に情けをかけられるような事は望んでない」

その時

《ドオオオン》

「なんだ・・・この馬鹿けた霊圧は」

「これは、なのはの魔力・・・」

（なのはがスターライトブレイカーを・・・）

遠くから聞こえるなのはの声にフェイトは空を見上げる

「全力全開！！スターライト——」

しかしなのはがその魔法の言葉を言い終わる前に

《——ドスツ——》

なのはの腹部に突き付けられた一本の斬魄刀

「あっ・・・あっ・・・」

フェイトの漏れるような声と共に

「なのはあああああ——」

白い悪魔は墜ちた

第十三話 再戦 終

時は少し前に遡り

一本の斬魄刀と一本の腕が交差しあう

一人は黒い死霸装を着た金髪のいかにもな美女。

加えてもう一人は手にメリケンサックのような物を付けて頭には獣耳、腰に尻尾を生やした男

まるで美女と野獣のような組み合わせである（野獣ではないが）

「あんだ・・・あたしの相手なんかしてて良いの？」

「・・・」

「隊長の相手してるあの子・・・危ないわよ」

「ふんッ!」

松本の言葉を遮るかのように拳を繰り出すその男、ザフィーラ
松本はそれを斬魄刀で受け止める

「ッと・・・危ないわね」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ふいに沈黙が戦場を支配する

「・・・あんたさあゝなんか喋ったらどうなの？」

「・・・・・・・・」

松本が喋りかけてくるも無口を貫くザフィーラ

「私、おしゃべりな男も嫌いだけど無口な男もあんまり好きじゃないのよね」

「・・・・・・・・」

「何考えてるか分かんなくって・・・」

松本の挑発のような言葉を聞き、それでも表情を崩さないザフィーラ。

「戦場で言葉はいらぬ・・・・・・・・何か知りたいのなら拳で語り合えばいい・・・」

「・・・あんたそういう奴なのね・・・一角にでも回せばよかった

かしら」

「ともかく死神・・・お前達の存在は危険過ぎる・・・」

そう言うときファイラの足元に魔法陣が展開される。咄嗟のことに身構える松本。しかし

「ふんッ！」

地面からファイラによって形成された幾重もの魔力の塊が松本を射ぬく

「きゃッ！？」

いきなり地面から攻撃された事に驚き咄嗟に空中へ跳び下を確認する松本

。少しでも回避が遅ければ串刺しになっていただろう。松本の死覇装を掠ったのを見れば左足の部分が少し破れていた

「危なッ・・・魔法ってこんな事も出来るの」

「ハアアアーーーー！！」

「ッ！？」

空中に回避した松本に追い撃ちをかけるように殴り掛かるザフィーラ

「きゃあー!!」

松本は何とか斬魄刀で受けたもののその威力に吹き飛ばされ、盛大な音をたてて地面に吹き飛ばされる

「やばッ!」

吹き飛ばされたその先には先程ザフィーラによって攻撃された地面。その攻撃の跡はまだ残っており、そこに止まる事なく落ちていく松本

「このままじゃ――」

あの地面に形成された無数の刺に串刺しにされてしまう

その時

《ドンッ!!》

松本の右腕に何らかの衝撃が与えられた。その衝撃のおかげで松本は地面にぶつかる事なく危機を回避した

「痛い、助かったけど……って隊長?」

松本に衝突したのは自分の上官である日番谷だった

「隊長、助かりました」

そう言って日番谷に抱きつくが

「――違う」

返って来たのは否定の言葉

日番谷の視線の先には

「どうだ、あたしの攻撃は!」

グラーフアイゼンを構え仁王立ちをしたヴィータの姿があった

「くそッ・・・」

「隊長・・・もしかしておされてます?」

日番谷の視線の先にはグラーフアイゼンを構えながら仁王立ちする
ヴィータ

更にその後ろにはレイジングハートを持ったなのはの姿があった

「・・・大丈夫だ、この程度」

そう言い立ち上がる日番谷

そのままヴィータの前まで瞬歩で移動し切りかかる

「ッ——甘えッ——!」

ヴィータは日番谷の斬撃をグラーフアイゼンで弾き返し、そのまま日番谷に向けて突進する

「アイゼン!カートリッジロード——!」

《Explosion》

「ラケーテンツハンマー——!」

カートリッジを使い日番谷に攻撃するヴィータ。日番谷はいち早くそれに気付き回避する。しかし

「ディバイン——バスター——」

回避した日番谷に襲い掛かるピンク色の砲撃。日番谷は回避する暇もなくその砲撃にのみ込まれた

「隊長——!」

自分の隊長である日番谷が砲撃にのみ込まれた事に声をあげる松本。
そのまま日番谷の元に駆け付けようとするが

「お前の相手は俺だアアア」

「くッ——」

ザフィーラによって阻まれる

「・・・今降伏するならテメエ等はまだ罪が軽くなる」

「だから降伏してください！」

なのはとヴィータが問い掛ける先には

「はッ——はッ——くそッ」

片膝をつき苦しそうに呼吸をする日番谷の姿

日番谷は現状劣勢であった。ルピとの闘いから録に休息もとれておらず、霊圧も既に半分を切っている。元々卅解に制限時間がついている日番谷、今の状況では卅解どころか始解するのもきつくなっている。加えて二対一というハンデを持っていて相手は隊長格並の霊圧を放っている。圧倒的に日番谷が不利であった

（少し辛えが・・・やるしかねえか・・・）

日番谷は呼吸を整え残り少ない霊圧を高めていく

「ッ——あいつッ」

「待って！ヴィータちゃん——」

それに気付いたヴィータがなのはの言葉も聞かず日番谷に突っ込む
しかし

「霜天に坐せ——」

日番谷はヴィータの攻撃が迫る前に開放した

「——氷輪丸」

途端日番谷から放たれる霊圧に突進していたヴィータは怯み手で顔を覆って眼をつぶった

ヴィータが眼を開けて一番に眼に映ったのはの自分持っているグラ
ーファイゼンだった

「なッ——!!」

見れば鎖のような物がグラーファイゼンに絡み付いている

「確かテメエのその武器の名前・・・アイゼンだったよな」

不意にヴィータに喋りかける日番谷

「それが何だよ!!——クソッ、離せこの鎖ッ」

日番谷の問い掛けに答え鎖を外そうとする

「アイゼン——嫌な名前だな・・・」

そう言った瞬間日番谷から鎖を伝って放たれる霊圧、その霊圧はやがて冷気を纏いヴィータのグラーファイゼンに到達する

「なッ!? アイゼンが——」

「——凍っていく!?!」

パキパキという音をたてながら凍っていくグラーファイゼン。それを見て驚愕するヴィータなのは

「まだまだ・・・これからだぜ」

そう言って日番谷は二人を睨みつけた

第十四話 撃墜

「あ・・・アイゼンが・・・」

自分の相棒であるグラーファイゼンが凍った事によってショックを受けるヴィータ

「そうか・・・私のバインドを破ったのもその技だね・・・」

「・・・・・・・・」

日番谷はグラーファイゼンが凍った事を確認すると鎖を緩めて自分の手元へと手繰り寄せた

「・・・テメエ等の勧告に従うつもりはねえ。それよりも一つ聞きたい事がある」

「なに・・・かな？」

「テメエが言ってるその男は頭に仮面が着いてなかったか？」

日番谷がなのはが言っていた男について質問した

「ついてるよ・・・名前はルピ君」

既に予想していたその名前を聞いてバツが悪そうな顔をする日番谷

「やっぱりか・・・悪い事は言わねえ、今すぐそいつを俺達に引き渡せ」

「そうしてまた殺すの？虚を・・・」

「そうしねえと殺されるぞ・・・お前達が」

「ルピ君はそんな事しない！私見たよ、ルピ君が君の凍結攻撃で死にそうになってたの」

感情が高ぶって大声を出してしまうのは

「君の攻撃を見て確信した。私のバインドを破った時、ヴィータちゃんデバイスを凍らせた時、君の使ってたその技でルピ君をやったんだって！！」

なのはは虚に関して何らか誤解している

そのことを悟った日番谷はなんとか誤解を解こうとするが

「それはあいつが——」

「虚だから？」

「ッ！——ああそうだ——よく聞け、あいつら虚は——」

「もついい！！」

なのはが叫んだ。とても悲しそうな顔をしてじっと日番谷を見つめる

「もついいよ・・・君達を捕まえてルピ君に謝らせる——」

そう言ってデバイス構えるなのは、その目にもう迷いはなかった

「ッ——話を聞け、この分からず屋」

日番谷も苦い顔をしながら武器を構える

なのはが日番谷に魔力弾を放とうとするその時、日番谷に向けて紅い鉄球が放たれた

「——ッ!？」

警戒していなかった日番谷は諸にその鉄球を受けてしまった

「——ガッ!？」

数メートル吹き飛ばされて転がりながら倒れる日番谷。

「デメエ・・・よくもアイゼンを・・・」

(ッ——しまった・・・)

斑目、綾瀬川のように直接攻撃系のヴィータを見て武器さえ封じたら攻撃の術はないと思い込んでいた日番谷

直ぐさま反撃に移ろうとするが

「これはッ!？」

両手両足をバインドで縛られた

そして不意に感じた膨大な霊圧、日番谷が見上げたその先にはピンク色の球体を形成したのがいた

「まずは気絶させる！」

どんどん集束されていく魔力。それは日番谷から見ても破面の放つ虚閃と同等、それ以上の威力があると直ぐにわかった

（——ヤバイ——）

「全力全開！！スターライト——」

その魔法の言葉を唱えるその時

《——ドスツ——》

「駄目だよお、オネエサン」

後ろから腹部に突き刺される斬魄刀

「そこから先は――」

腹部を刺された痛みと驚きに震えながら後ろを向くと

「――僕の仕事だからさ」

斬魄刀の柄を握りながら笑っているルピがいた

「う・・・そ・・・」

「ありがとうおねえさん、そしてさようなら」

ルピがなのはの腹部から斬魄刀を抜き取るとなのはは崩れ落ちるように墜ちた

周りから聞こえる様々な叫び声

(みんな――)

それすらも聞こえず

(――ゴメン)

心の中で謝った

「なのはアアアア!!」

その叫び声はフェイト

「デメエエエ!!」

続いてヴィータが叫ぶ

ヴィータの中で忘れられない記憶。

任務中に一度大怪我をしたなのはの記憶が鮮明に蘇り

「ぶっ殺すッ!!」

気がついたら何も考えず飛び出していた

「ッ!?!——バカ野郎ッ!!」

それを見た日番谷は直ぐさま氷輪丸でバインドを破壊、そのまま飛び出した

「うああああッ!!」

ヴィータはグラーフアイゼンが凍っているにもかかわらずそれを忘れ、その武器で殴りつけようと突進する

「次は君でいいのかな?オチビさん」

斬魄刀を構えヴィータを見するルピ

「碎け——ろオオオ!!」

ヴィータはそのままグラーフアイゼンをルピに向かって振り下ろした
しかしその攻撃はあっさりと斬魄刀を持っていない手で防がれる

「ん、殺気は十分だけどそんな武器じゃねえ」

ヴィータは言われて思い出す、自分の武器は日番谷によって凍った
ままだという事に

（しまっ——）

気付いた時にはもう遅い、ルピが斬魄刀を振り上げていた

「じゃあね、オチビさん」

（——斬られるッ！——）

ヴィータは目をつぶった

しかし斬られる痛みの代わりに来たのは左側からの衝撃。

その衝撃に驚き目を開ける

そこには

ヴィータを庇った日番谷の姿があった

「お、お前——」

「バカ野郎!! 武器も録に使えないのに突っ込むやつがあるか!!」

「お前——!!」

「とつとと下がれ!!」

日番谷の言葉も聞こえず見つめるその先

「お前!——腕が!!」

ヴィータの視線の先、そこには在るはずの日番谷の右腕が無かった

「あれ？オチビさんを斬ったはずなのに小さな隊長さんが斬れちゃった」

そう言って笑うルピ

「ちッ——」

日番谷はヴィータを抱えて松本がいる所まで瞬歩で移動した

「隊長！—」

松本が日番谷に駆け寄る

「隊長——腕が！」

「騒ぐな・・・これ以上出血はしねえ」

そう言つと日番谷は氷輪丸で斬られた右腕を凍らせる

すると今まで大量に溢れ出ていた出血が止まった

「・・・よし」

「あ、あの・・・」

ヴィータが喋りかけようとするが

「喋ってる暇はねえぞ・・・」

「え・・・？」

日番谷は上空を睨みつける。そこには今の状況をあざ笑うかのよう
に微笑し浮いているルビがいた

「やあ・・・オチビさん。殺しに来たよ」

こうして新たな闘いが始まった

第十五話 思い

「なのはあああ——」

フェイトは一目散に傷ついたなのはに駆け寄った

「なのは、なのはあ！——」

目には大粒の涙を流しながら倒れているなのはの手を取る

「フェイト——ちゃん——？」

「大丈夫だよ！今シヤマルに頼んで治してもらおうから！」

そう言つて無いよりはマシだと自分の知る限りの治療魔法を使うフェイト

「フェイト——ちゃん——ゴメンね——私また——間違えた」

「いいよ！もう良いからなのはあ」

「冬獅郎君にね——聞いたんだ——ルピ君を——捕まえて——殺すの？——って」

フェイトはなのはの治療をしながら涙を流しながらも黙つてその話を聞く

「そしたら——冬獅郎君——そうだって——言つて——それで私——頭に来て——ゴフッ」

喋っている最中に吐血をするのは

「ゆっくりで良いよなのは、ちゃんと聞くから、全部聞くからッ」

「冬獅郎君——何か私に——伝えようとしてた——でも私——それを聞かないで——また——間違えて——」

涙を流しながら話していくのは

「フェイト——ちゃん——お願い——私を——治して——せめて——動けるくらい——まで——」

「当たり前だよ!」

「あり——がとう——」

そうしてなのはは眠るように目を閉じた

「絶対死なせないからッ——なのは!——!」

「高町が・・・やられた？」

一部始終見ていたシグナムは自分の目を疑った

なのはの腹部から斬魄刀が貫かれている、しかも貫いたのは自分が保護したルピだった

シグナムが呆けていると突然一角の治療をしていたシャルマルがシグナムに向かって喋りだした

「シグナム、フェイトちゃんから念話が来たわ！！」

「念話？」

「なのはちゃんを治してつて——でも今行ったらこの人が・・・」

そう言いシャルマルは一角を見る。現在シャルマルは一角の治療をしている、しかしまだ一角の治療が最低限死しない所まで届いていない

「あとどのくらい掛かる・・・」

「短くて五分・・・いや、六分は掛かるわ」

「六分か・・・しかしそれでは高町が・・・」

シグナムは頭を抱える。管理局員として一角を死なせる訳にはいかない。しかし一角の治療を優先すればなのはが危ない。シグナムは

自分が治癒魔法を使えない事を悔やんだ。その時

「僕がやるよ……」

突然現れた男

「一角は僕が治す……」

黒い服を着たオカッパの死神、服はボロボロになって動くのも辛そうに歩いて来る

「貴様——」

「だから君達はそれぞれの所へ」

「で、でもあなたもボロボロよ、そんな状態で……」

「大丈夫だよ、一角を治すだけだから……」

シグナムは数秒考えるようにして

「わかった……此処はお前に任せる」

「ちょっと、シグナム!？」

「高町も危険な状態なのだ、此処は任せるしかなかるう」

シヤマルもその言葉を聞き

「……わかったわ」

静かに納得した

「では此処は任せたぞ・・・」

そう言い残してシグナムとシャルはそれぞれの場所へと向かった

「行つたか・・・」

シグナムとシャルが居なくなつた事を確認した弓親はゆっくりと腰を降ろし地面に座り込む

「一角・・・随分と酷くやられたね」

「・・・」

反応は返つて来ない

「まあ僕も人の事言えないけどさ・・・」

「・・・」

「君は満足したかい？一角・・・」

「・・・・・・・・」

「まだでしょ？」

「・・・・・・・・」

「まだ黒崎に勝って無いよ」

「・・・・・・・・」

「隊長にも勝ってないし・・・」

「・・・・・・・・」

「射場さんだって引き分けのままだったんじゃない？」

「・・・・・・・・」

「・・・それになにより今倒された相手にも勝ってない」

「・・・・・・・・」

「一角はまだこの中の誰にも負けてない。それは死んでないから・・・」

「・・・・・・・・」

「まあ今死にそうだけどね」

「・・・・・・・・」

「だから僕が治す」

「・・・・・・・・」

「君を負け犬になんかさせるものか」

「・・・・・・・・」

「と言うのは全部言い訳・・・」

「・・・・・・・・」

「本当の事を言つとまだ死んでほしくない」

「・・・・・・・・」

「もっと君と一緒に色々な敵と闘いたい」

「・・・・・・・・」

「だからごめんね、一角」

「・・・・・・・・」

「今から僕は君のプライドを踏みにじるよ」

長い独り言を終えた弓親が立ち上がる。斬魄刀を持ち霊圧を高めていく

「本当に皆必死だし今なら気付かないね」

そして弓親は斬魄刀を構え

「咲き狂え——」

自分の斬魄刀の本当の名前を言い放った

＊＊

「嘘・・・」

「何でルピさんが・・・」

FW陣達の顔が青い、モニターを凝視してその現状を受け入れる事に必死になっている

「さっきまで此処にいたのに・・・」

声を震わせながら確認するかのように呟くエリオ

「嘘・・・嘘だよネティア！モニターが壊れてるんだよね！」

壊れているはずがない、そんな事はわかっているスバル。しかしその淡い希望にすがってしまう

ティアナはそんなスバルを見て目を反らしてしまう

「嘘・・・嘘だよ、なのはさんが・・・」

スバルは俯きながら座り込む

そんなスバルにキャラコが声をかける

「だ、大丈夫ですよ・・・シャルさんもいますし」

「・・・うん」

キャラコに励まされ少し落ち着くスバル

「一番解らないのはあのルピって人よ、どうしてあの人が・・・」

ルピについて詳しい事はまだ知らされていないティアナ達、なので何故ルピがなのはを刺すような真似をするのか理解出来ないでいる

「とにかく、私達に降された命令は待機命令・・・どうする事も出来ない」

そう言いながら拳を握りしめる

（私にも力があれば・・・）

「今はただ、祈って待つよ・・・」

そう言って心を落ち着かせた

第十六話 十刃

地面に突き刺さる一本の斬魄刀、その斬魄刀を握るのは一本の腕、しかしその腕は肩から先がない

日番谷はその腕の前に瞬歩で移動、そのまま腕ごと斬魄刀を引っこ抜くと直ぐさま斬魄刀と腕を分離、そして斬魄刀を左手に持ち替える

「利き腕じゃないが・・・仕方ねえ」

左手に持ち替えた日番谷は上空にいるルピを睨みつける

「せいぜい楽しみませてね・・・小さな隊長さん」

嘲笑いながら日番谷を見下ろす、しかしその目は笑っておらず憎しみに満ち溢れていた

「・・・テメエ、何でこんな事しやがった」

いつ何処から襲われても良いように十分に警戒しながらルピと会話する

「おねえさんを刺した事？あれはおねえさんが悪いんだよう、本当なら君をなぶり殺した後に殺すつもりだったんだけどさ——」

ルピは面白可笑しく喋っていく、まるで自分が考えた策を披露するかのよう

「いざ来てみたらもうびっくり！、おねえさんが君に止めをさそう

としてるんだもん。君を殺すのは僕の役目なのに「はアアアアッ
!!」・・・ね」

ルピが喋っている最中に後ろから振り下ろされる刃、ルピはそれを
身体をずらして余裕の表情でかわす。後ろを向けばレヴァンティン
を構えたシグナムが鬼の形相で睨みつけていた

「貴様!!何故お前が高町を討った!!」

シグナムは激昂しながら叫ぶ

「おねえさん・・・この世にはね、弱者と強者がいるんだよ。弱者
は強者に何されようが文句は言えないの」

「貴様ツ!!」

シグナムは怒り狂いルピに斬りかっっていくが、それをルピは全てか
わしていく

「そんな腕でそこまで闘えるなんて凄いね、おねえさん・・・」

利き腕を怪我していて録に武器も持てない状態で攻撃していくシグ
ナム、それを見たルピは若干驚き素直に誉め讃えた

「でも——それだけ・・・」

するとルピの目が急に冷たくなりシグナムを射ぬく

「所詮は僕より弱い弱者なんだから――」

腰にある斬魄刀を抜き出しシグナムの斬撃を防ぐ、直ぐさま右足に力を込めに腹部に蹴りを入れた

「ぐッ!!」

腹部を蹴られ痛みに堪えながら体制を立て直し前を見る。するとそこには

「だから死んでね――おねえさん」

ブカブカの袖の中にある腕、その腕がシグナムの方を向き、先からは紅い球体が形成されている

――攻撃だ!――

そのことをいち早く感じ取ったシグナムは直ぐさま回避行動に移った

「――虚閃――」

「なッ——」

瞬間、回避出来るはずだとばかり思っていたシグナムの目に映るのは紅一色

シグナムはその紅い光りに飲み込まれた

＊＊

「シグナム!!」

虚閃を喰らい落ちるいくシグナムを見てヴィータが叫ぶ

「くそッ！！何だよあれ、攻撃範囲広すぎじゃねーか！！」

完璧な回避した筈にさえ見えたシグナムさえも飲み込む紅い砲撃に驚きが隠せないヴィータ

自分も闘いに、シグナムを助けに行きたいがデバイスであるグラーファイゼンが凍ってしまっている以上闘うことが出来ない、というより闘いたくない

自分のせいで日番谷の腕を失ってしまった。同じ過ちを繰り返したくないという気持ちがヴィータの足を止める

「・・・・・・！？」

すると突然手に持っていたグラーファイゼンに異変が起こる

見れば日番谷によって凍らされたアイゼンの氷がパキパキと音をたてて崩れ始めた

「これは・・・」

「氷輪丸の能力を解除した・・・」

後ろから聞こえてくる声、振り向けば左手に斬魄刀を持った日番谷がいた

「これでわかっただろ、あいつはテメエ等の敵だ」

「・・・・・・・・」

「どういう経緯であいつをそばに置いたのか知らねえが、このままじゃ確実に全員殺される」

「ッ！・・・それは」

ヴィータは自負の念にかられて口ごもる。今思えばもっとルピを警戒するべきだった、あの時医務室で放とうとしていた攻撃、《死神だと思った》と言って皆をごまかしたあの攻撃は人を殺せる威力はあった。それなのにそれを見逃して機動六課に一人残して・・・

「え？・・・」

考えて気付いた

（キドウロツカニオイテキタ？）

混乱するヴィータ。ルピを機動六課の医務室に置いてきた、しかも最後に斬魄刀を渡して

（キドウロツカニハダレガイル？）

そしてルピは裏切りなのはを刺した。そして今残りの者を皆殺しにしようとしている

「は・・・や・・・て？」

ヴィータの中で導きだされた答え・・・それは

「ヴィータ・・・大丈夫だ」

突然後ろからかけられる声、振り返るとザフィーラが腕を組んで立っていた

「主はやてはまだ生きておられる・・・」

「本当か・・・本当に生きているんだよな！」

その言葉を聞いた瞬間、淡い希望にすぎるようにザフィーラの服を掴む

「ああ・・・我等が生きているのがなによりの証拠だ・・・」

言われて気付く。確かに夜天の書の主であるはやてが死んだならばそのプログラムである自分達守護騎士も消えてしまう。しかし自分達がまだ存在しているということは主であるはやてはまだ生きているということだ

「よかつ・・・た・・・」

涙を流しながら安堵するヴィータ、すると松本がそんなヴィータに話しかける

「何だか知らないけどあんた達・・・協力してくれない？」

ザフィーラもヴィータもじつと松本を見つめる

「今の状態でもあいつに勝てる可能性は限りなく低い、けどそれでもやるしかないの」

真剣な松本に

「わかった・・・」

ザフィーラは静かに了承した

「さて・・・もういいかな」

ルピは日番谷達を見下ろしている。何やら作戦を立てていたのを面白がって待っていたのだ

「もういいかい、小さな隊長さん？」

「・・・」

睨みつけるように見る日番谷と笑いながら見下すルピ

両者が構えを取った瞬間闘いは開始された

「はああああ！！！」

飛び込んだのはザフィーラ、右拳に力を込め殴りつけようとする

しかしルピはそれを難無くかわし反撃に転じる

「ぐぬう！」

腕をクロスさせかろうじて防ぐがその威力は並ではない。吹き飛ばされながらもザフィーラはルピの足元に魔法陣を展開させた

「ん？」

それに気付いたルピは直ぐさま回避、上空に飛び上がる。しかし飛び上がった場所にはまるで灰のような粉が散漫していた

「灰猫！！！」

言葉が発声されると同じに周りの灰がルピを囲むように円の形になった

「わかってないの？君達・・・」

【血肉の仮面——万象——羽搏き——ヒトの名を冠す者よ——】

「君達の、しかもそんなボロボロの状態の攻撃は僕には届かないよ」

松本を挑発するようにルピは言う

「あんだこそわかってないわね、私の役目はあんだの足を止めること……」

【雷鳴の馬車——糸車の間隙——光もて此を六に別つ——】

「？」

「私達の本当の狙いは……」

「【縛道の六十一……六杖光牢！！】」

すると灰猫によって動かなかったルピの周りに出現する三つの光、その光はそのままルピに突き刺さった

縛道が成功したことを確認するとすぐに上を向き合図を送る

「——今だ！！」

その合図に乗じてはるか上空から突進してくる紅い弾丸

「アイゼン！！」

《G i g a n t f o r m》

するとヴィータのデバイスであるグラーファイゼンがカートリッジをロード、形がハンマーのように変型しどんどん巨大になっていく

「喰らいやがれ！！ギガント・クラアアシュ！！」

《ドオオオンッ！！》

ヴィータの放ったギガントクラッシュは松本の灰猫をも巻き込みルピに直撃した

「はッ・・・はッ・・・どうだ！」

呼吸を乱しながらもアイゼンを元の状態に戻しルピの方を見る

煙が漂っていて姿が見えないがヴィータは手応えはあったと確信していた。いくらあいつでも致命傷の筈だ・・・と

しかし

「――虚閃――」

煙からヴィータに向けて放たれる紅い砲撃。スキを突かれたヴィータは回避することも出来ずに直撃、そねまま地面に向かって墜ちる

ヴィータが虚閃を喰らわされたことに驚きの表情をする松本、しかし

「驚いてる暇ないよ、綺麗なおねえさん」

突然正面に現れたルピに腹部を拳で一突きされる、声を漏らしながらも気を失う

「あとは――」

「はああああ！！」

「——君だね」

後方からルピを殴りつけようとするザフィーラ、しかし

「——虚弾——」

拳がルピの顔に届くまで僅か数センチのところで衝撃に吹き飛ばされるザフィーラ

「虚弾、虚弾、虚弾、虚弾」

虚閃よりも威力が劣る虚弾、なのでザフィーラが動かなくなるまで何発も当てていく

「虚弾、虚弾、虚弾——」

動かなくなったのを確認すると攻撃をやめる。そのまま顔を曲げて最後の一人である日番谷を見る

「お待たせ、小さな隊長さん」

大分霊圧を消耗したのか日番谷は片足を地面につき苦しそうに呼吸をしている

「君には気絶なんて生優しいことはしないから安心して・・・」

歩み寄ってくるルピ

「手足を、いや、先ずは手の指を一本ずつの計十本切り落としていこうか」

楽しそうに笑いながら日番谷の目の前に立つと

「あ、ごつめ〜ん。腕が片方無いから指は五本だ——っけ!」

日番谷の腹部をおもいつき蹴り飛ばした

「がッ!」

日番谷はそのまま数十メートル吹き飛ばされた

「ガハアッ!!ゴホッゴホッ」

「やっぱり痛みで気絶しちゃあ困るから最初はこれだよね」

そう言うつと日番谷を殴り蹴りし続けるルビ

「本当凄いやね〜こんなにボコボコにされても気絶しないなんて、まがりなりにもちゃんと隊長なんだね」

日番谷の胸倉を掴み上げるとそのまま遠くまで投げ飛ばすルビ

「十分気が済んだからそろそろ止め、さしてあげる」

そう言うつと斬魄刀を鞘から抜き出す

「テメエには・・・一度・・・教えた筈だぜ・・・慢心つて言葉を・・・」

ボロボロの日番谷が地面をはいつくばりながら喋りだした

「勿論覚えるよぉ、だから今度はちゃんと止めをささなきゃね」

一歩一歩日番谷に近づいていくルピ

「テメエは・・・またその慢心のせいで俺達に負ける」

《パライイン》

そう言うのと遠くから結界が壊れる音がする

その音が壊れた瞬間に感じる膨大な魔力、ルピがその方向をみると

「全力全開——」

ピンク色の球体を形成したのが立っていた

「何だよ、この霊圧!!」

ルピはその膨大な魔力を肌で感じると本能で回避しようとするが

「なッ!!」

動けなかった。ふと下を見れば足から膝まで凍っていた。日番谷の氷輪丸によって

「クソッ、クソッ、クソッ」

身体を引きずりながら森を歩く

「あのアマアアアア、よくもオオオオオ」

身体はボロボロど至る所から出血している

「次は・・・次は絶対に——」

そう言いかけたところで

《ドスッ》

「——え？」

頭に突き刺さされる斬魄刀

「悪いけどお前に次は無いわ」

目的を達成することなくルピは塵となって消えていった

第十七話 影二つ

「素晴らしい・・・」

一人の男がモニターを見て呟く

白衣を着た紫の長髪をしているその男、自分の手元に玩具が手に入ったかのように喜んだ表情をしながら感嘆の声をあげる

「『プロジェクトF』や『エース・オブ・エース』、はたまた『闇の書の主』がいる機動六課」

視線をモニターに映るなのは達に移動させて机の上にあるコーヒ―を手にとる。そのまま口元まで運び口の中に流しこむ男

「・・・甘いな」

味は予想していたよりも甘く、飲めないと理解するとすぐに机の上に戻す

「やれやれ、私は甘いのは苦手だというのに」

軽く溜め息をつきながら今度は視線をモニターに映る黒衣の少年に移動させる

「まあいい・・・私は今気分が良い。何と言っても巡り逢えたんだからね・・・《死神》に――」

男は笑いながら空中に手を延ばした、すると空中からディスプレイのようなものが出現した

すると男はコーヒートを片手に目にも留まらぬ速さで文字を打っていく。すると

「帰ったで〜」

モニタールームのドアが開き入って来る男

男は帰っ来るなり椅子に腰をかけ、たまたま目に入ったコーヒを手を取った

そのまま何の言葉もなしにコーヒを一口啜るが・・・

「——甘あッ！」

余りの甘さに口に含んでいたコーヒーを全て吐き出してしまつ男
吐き出されたコーヒーは机や床に盛大にぶちまけられた

「誰や！こんなクソマズイコーヒー入れたんわ！！」

「君の相方だよ。甘党なのかい？女の子は甘いものが好きだと言っ
しね」

「女の子お？あいつが女の子やったら世の中の全ての生き物は甘党
になつてまうわ」

「ふふふ、そんな事言っていたらまた蹴りをいれられるよ」

楽しそうに談笑する二人の男

「んで・・・あいつは？」

「訓練室で私の娘達と遊んで貰っているよ」

「またかい・・・」

「いや、こちらとしては有り難いよ。あの娘達も負け続けで随分と
悔しがっていてね、良い刺激になる」

「ほゝか・・・」

白衣を着た男は座っている男にお茶を差し出す。

男は出されたお茶を一気に飲み干しお代わりを要求

「それで、どうだったんだい？」

「どうもこれも普通に殺して終いや」

「そうかいこちらとしては是非とも研究したかったんだがね」

「諦めろや、あいつ等は俺等の敵や・・・やから俺等が殺す」

「そうかい・・・じゃあ代わりに君達を研究させて欲しいんだがね」

白衣の男は不気味な笑みを浮かべて座っている男を見た

しかしそんな男に対してお代わりしたお茶を飲みながら言う

「止めとけ止めとけ、俺等みたいな《出来損ない》弄ったらどないなるかわからんで」

「そんなに危険なのかい？君の中の《化け物》は・・・」

「まあ暴れだしたらこんな施設三分も持たず半壊やろうな・・・」

「それは恐ろしい」

さっきまでの不気味な笑みを消し素顔に戻る白衣の男。少々睨みを効かせたつもりだったのだが何の反応も無く返してくるので毒気を抜かれてしまった

「まあ居候でタダ飯喰らいの身やし最低限お前等の味方はしたる」

「随分と優しいね、理由はあちら側に死神がいるからかい？」

「まあそれもあるわな」

つまらなさそうに手に顎をのせ答える

「随分と敵が多いんだね」

「美男子には敵が多いって言うやろ」

「ふふ、道理で私にも敵が多い訳だ」

するとモニタールームの扉が開かれジャージ服を着た一人の少女が現れた。少女は座っている男を見るなりまるでネズミを見つけた猫のように本能のあるがまま飛び蹴りを放つ

「真子イイイイ！！」

「痛いッ！？」

少女の放った飛び蹴りは見事に真子と言う男の後頭部に直撃

机や椅子をひっくり返しながら派手に転がる真子

ダメージが大きいのか数秒の間後頭部を押さえながら悶えている

「何すんねんこのドチビ!!」

まだ後頭部を押さえながら立ち上がり少女に怒鳴り込む。ちなみに白衣の男は二人から少し距離をとり見物している

「お前今うちの入れたコーヒー零した、よって死刑」

「なんでやねん! お前が来る前は無事やったやろ! ? お前が蹴り入れたから机ごと吹き飛んだんやろ!!」

「口答えした、死刑」

「理不尽や!!」

一人遠くから眺めている白衣の男、ジェイル・スカリエッティはモニタールームで騒ぐ二人を見ながら

「・・・やれやれ、騒がしな」

そう呟いた

「むう・・・日番谷隊長達は何処いどこへ行つてしまわれたのか・・・」

風が佇む夜の空、その空の下を歩いている一人の男が呟く。男は黒い服を着て腰には斬魄刀を所持している

「日番谷先遣隊の謎の失踪以来破面の襲撃が無いからいいものの・・・戸魂界には一刻も早く代わりを派遣してもらいたいものだな」

町を巡回しながら異常が無いか確認、さらに虚がないか自分の周囲に霊圧が無いかを探索する

「ん、今日もないな。回れ！右！帰宅！」

異常が無いことを確認するやいなや直ぐさま自分の借宿である廃墟ビルに向かおうと歩き始めた

「しかし考えてみれば番谷隊長達が消えたら隊長の座空くんだよな・・・あれ？ここで頑張ったらもしかして俺出世出来るんじゃないかね？」

日番谷達がいなくなったことで淡い希望を持ち始める男

「今空いた席は十番隊隊長と副隊長、十一番隊三席と五席・・・隊長と副隊長は無理だとしても席官なら・・・」

考えながら夜道を歩いていくと何か小石のようなものを蹴ってしま

う。最初はただの石かと思ったがよく見ると綺麗な長方形をしていて夜なのに異様な光を放っていた

男は不思議に思いその石を手にとると訝しい気に見つめる

「ん？・・・あれはアフさん・・・」

すると一人の少年が十字路からビニール袋をぶら下げながら歩いて来た

「おーい、アフさん」

少年は見覚えのある顔を見つけたと声をかけようと歩み寄るが

「うおッ!？」

急にアフさんと言う男がいた所が光だしその眩しさに思わず目をつぶってしまう

光が収まり目を開けるが

「あれ？アフさん？」

少年の前に先程までいた筈の男がいなくなっていた

「ちえッ・・・何だよ・・・」

男が消えたことに溜め息を尽きながら少年は家へと帰宅していった

第十八話 理解（前書き）

え、おかげさまで無事指定校で大学の内定がもらえました
まだ合格ではないですが気を引き締めていきたいと思います。
では本編をどうぞ

第十八話 理解

沢山のビルや住宅が立ち並ぶ町並み。しかし今やその町並みの多くは破壊され人の姿が一人も無く普段は賑やかなその場所も今では静まり返っている

そんな中、空には黒い死覇装の上に白い羽織りを着た死神や仮面をつけた元死神、更には尸魂界を裏切り破面を従えた死神達がそれぞれの思惑を胸に激しい闘いを繰り広げている

——随分と考え無しに突っ込んでくるね、命知らずな事だ『狛村左陣』——

——力で叩けば私を潰せると思ったか？——

——教えよう、力というのはこういうものを言うのだ——

白い服を纏った男に次々と墜とされていく死神達
多対一だというのに男を倒すどころか傷一つ負わすことが出来ずに
斬られていく

—— おや、久しいね・・・雛森君 ——

—— あ、愛染…隊長 ——

—— 君はまだ私の事を隊長と呼ぶんだね ——

—— まあいい、君を護ってくれるプリンスはもういない ——

—— ゆっくりと眠り給え ——

そう言くと男はゆっくりと斬魄刀を振り上げる。男の前に立たされた女性は膨大な霊圧にあてられ筋肉が収縮し動けずにいる

—— さようなら、私の元副隊長 ——

男は斬魄刀を振り下ろす

身体を縦にバツサリと斬られて大量の血が弾け飛ぶ、目には涙を浮かべてゆっくりと膝から崩れ落ちるように倒れた

——シロ…ちゃん——

——ゴメン——

女性は謝りながらゆっくりと目を閉じた

「雛森イイイイ」

大きな声を出しながら跳び上がる。全身汗でぐっしり濡れていて息遣いは荒く片方しかない右腕の手も少し震えている

冷静になり周りを見回してみるとそこは自分の知らない部屋だった。自分が寝ていたと思われるベット、部屋に置いてある器具やこの独特な匂いから四番隊と同じ治療関連の部屋だと推測する

「夢か・・・」

自分が見た夢が現実じゃないことに安堵感を覚え、しかしどこか不安な気持ちを抑えられずゆっくりと現状を確認していく

「俺は——確か・・・」

機動六課という魔法使い達からレリックという物を奪い取り逃走、その後戦闘になった。しかし闘っている最中に十刃であるルピが乱入、騙されていた魔法使い組と自分達死神が不意を突かれ次々と墜とされていく

その後ボロボロになりながらもどうにかルピを撃退することに成功、霊力と体力を使い果たした自分はそのまま気を失った

日番谷は自分の右腕に視線を送る

「こつちも夢じゃねえか・・・」

無くなった、正確に言つとルピによって斬られて失った右腕を見ながら呟いた

肩から下が無く氷輪丸の能力で止血していた傷口もしっかりと治療によって止血され、包帯でぐるぐる巻きになっていた

「気がついた？」

不意にかけられた言葉、振り向くと隣のベットに横たわっている栗色の髪をした女性、なのはがこちらを見ている

「冬獅郎君、二日くらい寝っぱなしだったよ」

「二日・・・」

二日、日番谷は別段驚くことなく理解した。本来霊力を使い果たした死神は丸一日かけて霊力を回復させる。一般隊士ならばおよそ半日程度で全快するだろう。

しかし日番谷の場合、まず隊長格並の霊力を持ちルビと闘ったことで身体はボロボロ、体力も霊力もからっぽな状態になった

その状態でまだ体力も霊力も全快とはいかないものの二日で目が覚めたことは日番谷にとっては回復が早いほうだった

「ごめんね・・・」

また不意にかけられた言葉、なのはは俯きながら喋り始めまる

「私がちゃんと冬獅郎君の話を聞かなかったから・・・ルビ君が正しいって勝手に決めつけて」

話していくなのはの顔には生気が無く微かに手も震えている

「その結果みんなを傷つけることになって、君達死神にも迷惑かけて・・・」

次第になのはの顔から零れ落ちる涙、留まることなくどんどん溢れ出す

「——とに、ほんとにごめんなさい」

しばらく黙って話を聞いていた日番谷、なのはの話を聞き終えるとゆっくりと口を開き始めた

「何でお前が謝るんだよ・・・」

「・・・え？」

瞬間なのはは顔をあげた

自分が謝った後日番谷からどんなに責められるだろうか、何回も何回も自分の頭でシュミレートして、覚悟しているつもりだった。

しかし返ってきたのは自分への責め言葉ではなく

「こっちこそすまなかった、虚から護ってやれなくて」

謝罪の言葉だった

「ど、どうして冬獅郎君が謝るの!？」

「本来俺達死神の仕事は二つ、プラスである霊体は無事尸魂界へと導くこと、そしてマイナスと呼ばれる虚を斬ることで浄化し一般市民を護ることだ。しかし俺はそれが出来なかった」

「そ、それは私がルピ君の話を鵜呑みにして君の話を聞かなかつたからで——」

「それでもだ」

なのはの言葉を遮る形で言う

「それに、あの時素直にレリックを渡していたらこんなことにはならなかっただろうしな」

初めてなのはと会った時、素直にレリックを渡して機動六課に行っていたればルピのことわかり少なくとも此処まで被害は出なかった
そう思うと後悔の念が日番谷を襲う

「まあとにかく、これ以上お前が気に病む必要はねえ」

「でも・・・」

責任から逃れることが納得がいかないのか首を縦に振らないのは。
それを見た日番谷は

「わかった・・・じゃあ罪滅ぼしという形で俺達を保護しろ」

「え・・・？」

日番谷が言い出したことになのはは驚いた表情をして顔を上げた

「今俺達は何故か尸魂界に帰ることが出来ねえ、だから帰れるようになるまで保護という形で俺達四人の衣食住を何とかしてほしい」

「それなら何とかなるっていうかこっちにとっても好都合だけど・・・」

どこか釈然としないのは。元々日番谷達は捕まえて機動六課で監

禁するつもりだった。しかし日番谷が提案してきた案は多少扱いが良くなるだけで本来の目的と余り変わらない。それではあまり罪滅ぼしにならない。それを察した日番谷は

「それだけじゃねえ、お前等に会う前に管理局員を何人が倒しちまったからな。そっちの方も何とかしてくれ」

なのは達に会う前に何人かの武装局員を返り討ちにしてしまった日番谷達、その件についても何とかしてもらわなければ組織として俺達は放っておけないだろう

「わかった、やってみるよ」

どうにか納得したなのは、そうこう話していると医務室のドアが開かれ中に誰かが入って来る

「なのは」

「フェイトちゃん」

金色の髪をした女性、フェイトだった

「あ、起きたんだ」

「ああ、おかげさまでな」

「紹介するね、こちらは私と同じ魔法使いでライトニングっていう部隊の隊長をしているフェイトちゃん」

「フェイト・テストロッサ・ハラウオンです、よろしくね」

にっこり笑って挨拶をするフェイト

「ちなみに私はスターズっていう武装の隊長をしている高町なのは、知ってると思うけどよろしくね」

手を差し延べてくるのはとフェイトの手をとり握手をする

「で、こっちが――」

「いい、自分で言う」

日番谷のこともフェイトに紹介しようとしたのはだったが自分で出来ると止められた

「護廷十三隊十番隊隊長、日番谷冬獅郎だ」

「ごていたい？」

「たいちょう？」

なのはとフェイトが理解出来ずに固まっている。それに気付いた日番谷は少しずつ説明を加えていく

「ああ、護廷十三隊っていうのはお前等という時空管理局みたいなもんだ。死神の力、つまり霊力を持つ者で創られた組織だ」

「いや、そこじゃなくて・・・ってそこもんだけど」

「隊長って何？」

「護廷十三隊はその名の通り十三の隊で構成されている。その格隊のトップが隊長だ」

「いやいやいや、隊長って誰が？」

「だから格隊に一人だから十三人だ。名前言ってもわかんねえだろ」

「そうじゃなくって！冬獅郎君さつき十番隊隊長って・・・」

「十番隊隊長は俺だが」

数秒の沈黙の後

「ええええええ！？」

驚きの声をあげるなのはとフェイト

「嘘……君みたいな子供が隊長だなんて……」

「まだキャロやエリオと変わらないくらいの歳なのに……」

「護廷十三隊は実力があれば誰でもそれなりの地位に就ける」

逆に言えば実力がすべてといっても過言ではない、無論それなりの知識も必要だが稀にいる更木剣八のように異端な程の実力だけで隊長の就ける者もいる

なのは達としゃべっているとまた扉が開き何者かが入って来た

「失礼します。フェイト隊長はいらっしゃいますか？」

ツインテールをした少女、ティアナだった

「フェイトさん、部隊長が話しがあるので部隊長室まで来てほしいと」

「わかった。今行くよ」

その会話を聞いていた日番谷は

「俺も行く・・・」

そう言っつてベットから降りようとする

「ちょ、ちょっと！まだ寝てないと――」

「そうだよ、さっき起きたばかりなんだから！」

そい言っつて日番谷を留めようとする。さっき目覚めたばかりの日番谷はまだ立つことも出来ないと思っているのは達

「大丈夫だ、それに部隊長っつて奴とと話しがしたい」

しかし日番谷はすんなり自分の足で立ち歩いていた。そのことなのは達は驚きの表情をして日番谷を見る

「俺が気絶した理由は体力と霊力の消費という部分が多い。二日寝たら歩けるくらいまでは回復する」

「凄いね・・・」

「それよりも案内してくれ」

そう言って出て行こうとした時

「待つて!!」

なのはによって止められた

「私も行く」

そう言ってなのはは近くにあった車椅子に乗り込み日番谷達と共に
部隊長室に向かった

第十九話 犯罪者（前書き）

予定より早い更新

第十九話 犯罪者

「・・・・・・はッ!！」

一人の男が目を覚ます

深夜の空座町に虚が出ないか徘徊していたはずだった男、しかし急に謎の光に飲み込まれ気を失ってしまった

「ムウ、ここまで覚えているのだが・・・・知らない内に帰って寝てしまったのか？」

その後の事が記憶に無い。不可解に思いながらも男は二日酔いから目覚めたかのように立ち上がり周りを見回す

しかしながらそこはいつも自分が寝泊まっているボロボロ小汚い部屋ではなく、何やら甘い匂いを漂わせて誰が見ても一目でゴージャスな造りとわかる部屋だった

「・・・・あれ？俺の部屋こんなだったっけ？」

自分が先程寝ていたと思われるベットに近寄り触ってみた。いつも使っている寝袋とは違い高級な素材に枕は低反発を使用している。そして枕元には『定春』と書かれた犬の目覚まし時計、いつも体内時計で起きている自分とはエライ違いだ

「す、すげえ。隊長達が使っている物より遥かに良い仕様だ・・・」

他にも色々と見て回るがどれもこれも高そうな物ばかり

「これは・・・」

男は考える、何故自分の目の前にこんな光景が広がっているのか

「・・・・・・・・」

そして考えた結果

「神様だな・・・」

そう答えた

「そうだ！いついかなる時でも厳しい試練に耐え自分を磨き空座町を虚の手から護ってきた私に神様がプレゼントをくれたのだああ
！！」

そこには死神であるはずの男が神様などという存在を信じ、崇拝して高笑いしている姿があった

「よし！そうと決まったら存分に満喫させて貰おう」

そう言うなりベットにダイブ、さらにはその上で跳びはね子供のようにはしゃぐ。窓を開け外の景色を堪能し、更には数分後机の中など引き出しを漁りだし、自分の興味がありそうな物を片っ端から詮索していく

「ムウ、なんだか女物が多いな・・・」

中から出て来る物は殆どと言っていいくらい女性の物が多かった

「ええいつまらん」

男は机を詮索することを中断、今度は部屋の中にある家具でも一番大きいタンスに目をつけた

「此処にならあるはずだ。男として興味をそそる、私にピッタリな物が!!」

勢い良くタンスを開ける男。しかしそこには予想外な物が入っていた

「およ?」

一つ手に取り確認する。それはピンク色の三角の形をした物。男にとってこれほど興味がそそられないものはない物。

「下・・・着・・・?」

——ガチャン——

不意に背後から扉の開く音がした。手には下着を持ったまま振り返ってみると

「・・・・・・・・」

驚いたように目を見開き硬直している金髪の女性が扉の前に立っていた

「し……した……した」

「……へ？」

「下着泥棒おおー!!」

「はイイイツ!?」

全身黒い服を身につけていかにも犯罪を犯しそうな顔の男。極め尽けには手に自分の下着を持っている。それを見た途端に一瞬で下着泥棒という言葉が思い浮かび金髪の女性は大声で叫んだ

「ちょッ!ちょつと待てこれは違——」

「鮫島、鮫島ア!」

自分のもつとも信頼をおく執事、鮫島を呼びよせる。すると声を発して約五秒後、まるで瞬歩を使ったかのように金髪の女性の隣に一人の男が現れた

「どうなさいましたかな?お嬢様」

「鮫島!下着泥棒よ!!今すぐ捕まえて!!」

女性は部屋の中にいる黒服の男を指さして言う。男は指さされた方向を見つめると

散乱した自分の主の物と思われる数々の下着、荒らされた机やベツト、そして開かれた窓、カーテンが風によって煽られる

それらを見た瞬間鮫島という男は血相を変え

「・・・許すまじ」

口を開いた

「これほどの行い・・・万死に値する！」

「ひい!？」

すると鮫島という男はゆつくりと部屋の中に入っていく。それを見た男は近づいて来るその脅威に身体が動かず震えてしまう

「鮫島! 殺っちゃいなさい!!」

「はい、お嬢様」

主の命令を聞き入れると下着泥棒の男に向けられると思っていた鮫島の手はゆつくりと窓の淵にのばされた

「「へ・・・?」」

鮫島の行動に二人は間抜けな声をあげる。鮫島は現在進行形で下着を持つている男ではなく開かれた窓に手をのばしたのだ

「それではお嬢様、この鮫島・・・必ずや下着泥棒の首を持ち帰ります」

すると勢い良く窓から飛び降り凄いスピードで走りだした

「ちょッ！鯨島！？犯人ここ！！」

もはや主の声を耳に入らず

「バイニングス家の、それもアリサお嬢様の下着を盗んだ事、死んで後悔させてくれるわアアア」

執事は消え去った

「・・・・・・・・」

自分の執事がいなくなったことによりポカンと間拔けな表情になった金髪の女性。しかし頭を直ぐに切り替えて、目の前にいる男を見据える。

鯨島がいなくなった今この屋敷にいるのは掃除を主な仕事とするひ弱な女メイドのみ、対するは腰には刀らしき物を所持しておりどこからどう見ても極悪人な人相をしているアフロの男。

ただの下着泥棒とはいえ腰にある刀から察するに誰かに見られたら殺して証拠を隠滅するつもりだろう。このままではいきなり外に飛び出した鯨島はもちろん自分の命が危ない

（ど、とうすれば――）

頭をフルに回転させ思考する

（ていうかこの屋敷のセキュリティシステムがなんで反応しなかったのよ！！）

警備員を雇い配置しなくてもよい程の高性能なセキュリティシステム。例えば虫一匹だろうとも侵入を許さないそのシステムが全く反応しなかったことを心の中で愚痴りながらも考える

（はっ———そういえば！！）

女性はあることに気付くとまだ窓の方向を見てポカンとしている男を尻目に自分の部屋の机に向かって走りだした

（ここに確か！！）

机の引き出しを開けさらに隠すように造られた机の中のさらに奥、そこには人を撃つことを目的として造られた鉄の塊、拳銃が置いてあった

「動かないで！！」

その拳銃を手にとり犯人に向けて牽制する。男も驚いた表情でこちらに向き

「ま、待てガール！落ち着け！冷静になれ！」

「お父様から護身用にと持たされた物が役に立つとはね・・・」

父、デビットバイニングスによって渡された拳銃、そんな物渡され

ても困るとずっと引き出しの中に仕舞っておいたのが今役に立った

「速効性の麻醉銃よ・・・撃たれたくなかったらじっとしてなさい！」

「ガール、君は勘違いしている」

両手を揚げて刺激を与えないように会話を試みる

「まず一つ、俺は下着泥棒ではない」

「嘘も此処までくると滑稽ね、今その手に下着を持っていながら下着泥棒じゃない？馬鹿じゃないの？」

「オーケーじゃあこうしよう。ガールはその手にもっている拳銃を捨てる。そして私はこのパンツを捨てる。それで万事OKだ！」

「OKじゃないわよこの変態！！そんなの取引になんないでしょーがあー！！あんただけ下着を手から離しなさい！！」

男に苛立ちを覚えながらもしつかりと標準は男を捉えている

渋々と男は手に持っていた下着を床に置くとかかに気付いたようにこちらを向いて

「・・・あれ？なんで俺が見えるの？」

男のそんな言葉に金髪の髪をした女性アリサはを理解出来ないまま
立ち尽くした

第二十話 次元（前書き）

一ヶ月ぶりの更新

待たせてしまつてすみません

第二十話 次元

「・・・此処か」

目の前には部隊長室と書かれた扉がある。その前にいるのは日番谷、フェイト、車椅子に乗ったなのは、さらにその車椅子をおすティアナが立っている。先程から感じる恐らくティアナによるであろう視線を無視しながら此処まで歩いてきた日番谷。昔、真央霊術院で受けてきたのと同じような視線に呆れ半分懐かしさ半分を感じながら扉を見る

日番谷の代わりにフェイトが扉を開けて中に入る。するとそこには

「待つとつたでフェイトちゃん」

机に座るはやてとその守護騎士であるヴォルゲンリッター、ティアナを除いたFW陣、さらには弓親と松本もいた

「なのはちゃん・・・と死神君も来たんか・・・」

「隊長、もう動いても大丈夫なんですか？」

「・・・ああ」

一応警戒しながら中に入る日番谷。多種多様な視線を感じながら机に座っている部隊長であろう女性に目を向け話しかける

「テメエが部隊長ってやつか・・・」

「・・・そうや」

「いろいろと話したいことがある・・・がその前に松本、弓親・・・斑目はどうした？」

「一角は今療養中ですよ、大分酷くやられたようだったからね」

「そうか・・・」

一角の安否を確認すると早速本題に入ろうとする日番谷

「改めて聞く、此処は何処だ？」

「此処は機動六課・・・って言いたいところやけど君が聞いてんのは恐らくそんなことやないやんろ？」

「ああ・・・俺達は空座町にいた筈だが」

空座町でルピと闘っていた筈の日番谷達、しかし一瞬にして目の前の光景が変わった。その事が不思議でならない

「・・・厳密に言うことやな、君等死神は次元を越えてこの世界にやってきた可能性が高い」

「次元・・・？」

「せや、空間に大きく干渉することによって歪みができそこから別次元へと繋がってしまう・・・それが次元震や。その原因は様々で、私等みたいに技術によって次元を行き来するのもあれば大きな負担を与えて、つまりは強大な攻撃を与えることにより無理矢理こじ開

けるといった方法もある」

次元について説明していくはやて

「君等にも何かしらあった筈や・・・空間を捩曲げる程の何かが」

「・・・ああ」

確かにあった

あれが技術によるものかそれとも無理矢理こじ開けたものかは解らないが少なくともあの光のせいで空間に何らかの干渉をしてしまったのだろう

そうだとすれば今までのはやての話と道理が合う

「と言うことは此処は次元を越えて来た世界と言うことか」

「まあ簡単に言つとそういう事や」

つまりは死神も虚という存在も無い世界・・・そのかわりに聞いたこともない魔法使いといった逆に日番谷の世界には無かったものの存在。

「成る程」

そうすれば合点がいく。彼女達魔法使いが自分達死神を見た時にとつてきた対応、初めて見る謎に警戒するのも納得がいく

「もしよかつたら君等のいた世界の名前を聞いていいか？しばらく

は此処にいてもらう事になるけど、もし見つかったら帰すことも出来るかもしれん。」

その言葉に大きく反応する日番谷や松本達

「そんなことが可能なのか？」

「勿論可能や、さっきも言ったけどウチ等は技術によって次元を越えることが出来る。時空管理局の名は伊達やない。ただ君等には少しの期間だけこの機動六課に残ってもらわなあかんけどな」

帰る方法が見出だせなかった日番谷達にとってこれは嬉しい情報だった。こんなことなら始めから素直にレリックを渡していればと思う程に。しかし

「それはちよつと問題があるね」

そう言い出したのは弓親、それに反応して言葉を返すフェイト

「君達を元の世界に帰そうとするのに何か問題でも？」

「そこじゃない、僕が言っているのは今直ぐにでも帰してほしいということさ」

「悪いがそれは出来んな・・・お前達はこの世界の法に触れた。我々と敵対し剣を交えたことで我々が許しても上の連中が黙ってはいないのだ」

弓親の言ったことに対しシグナムが説明する

「それこそ僕等の知ったことじゃない。僕等には僕等のやらなければならぬことがある」

「デメエ黙って聞いてりゃ、帰してやるだけでもありがてえと思え
！！」

「勿論そこは感謝してるさ・・・でもそこだけだね」

「ああッ！？」

ヴィータが机を乗り出すようにして弓親を睨みつける

「感謝するところがそこだけなんだよ。君達がいなければ日番谷隊長も右腕を失わずに済んだ」

「——ッッ！！」

弓親のその言葉にヴィータは身を縮こめるように黙り込んだ。自分のせいなので言い返すことも出来ない

「一角もあんなに大怪我せずに済んだし僕等の損失は大きい」

実際に日番谷の右腕——つまり利き腕を失ったのは痛い。今の現状で隊長格の戦力の低下は一步間違えれば尸魂界の滅亡に繋がる。一角に至ってもそうだ、席官でありながら卍解を使える貴重な戦力。弓親と恋次以外は知らないし使うこともないだろうがそれでも強い

「それもこれも君達が破面なんかと手を組んだからだよ」

「——ッッ！それは・・・」

言葉が詰まる。どんなに言い訳をしても自分達がルピの手を取り日番谷達を襲ったことには変わらない

「ちょっと、やめなさいよ弓親。彼女達は破面や虚について何も知らなかったんだから」

それもまた事実。虚について何も知らないのは達を庇うように言う

「そうだね、虚について何も知らない。つまりは破面がどれだけ危険な存在かも知らない訳だ」

そう言って続ける弓親

「はつきり言わしてもらっけど君達が虚を知っていたとか知らなかったとかの問題じゃない。十刃であるルピを受け入れたという事実。そしてルピにそそのかされた君達が僕等へ攻撃したということ。そのせいで僕等は本来闘うべきルピへの戦力を削られてしまい、結果このようになった」

「でもあの子はちゃんとなのはが——」

「確かにその車椅子に乗っている彼女が倒した。僕達死神と君達魔法使いが力を合わせてギリギリね」

多少含みを入れながら話していく弓親

「君達は知らないだろうけどあの十刃、まだ二、三割の力しか出して無いよ」

『——ッ！？！？』

その場にいる誰もが驚いた、モニターで見ていたFW陣さえも。自分達が束になって隙をついてやつの思いで倒した相手が全然力を出していなかった。そのことが信じられなかった

「う、嘘や・・・あれで二、三割？」

「いくらこちらが負傷していたとはいえ・・・」

信じられない、信じたくないという気持ちがそれぞれの胸の中へと駆け巡る。すると松本が付け足すように説明する

「あいつら破面はね、斬魄刀に私達と同じように本来の力を封印しているの」

「私達みたいに？」

「ああ、ごめんなさい。説明する順番を間違えたわね」

すると松本は腰にある斬魄刀を手に持ち自分の斬魄刀を開放した

「唸れ——灰猫」

すると松本が持っていた斬魄刀の先の部分から崩れ落ちるように灰のようなものが出て来る。なのは達はその光景を驚きながら見ている

「これが私達死神が持つ力、斬魄刀の名を知り解放することにより強い力を得る」

松本は灰猫を斬魄刀に戻し腰に戻す。エリオとキヤロが名残惜しそ
うに見ていたが説明を続ける

「破面っていうのは虚っていう化け物が私達死神の力を取り入れて
進化した生き物、その姿は人型でその力は死神を遙かに越える。ほ
んと、今生きているのが不思議なくらいにね」

「そんな奴を・・・こちらは・・・」

自分がしっかりしていればルピの数々な不信な点に気付いたかもし
れないのに。そんなはやての部隊長としての後悔の念が責め立てる。

「そしてさらに言うならば僕達の世界にはその十刃があと十体くら
いはいる。さらにその下には君達くらい強い破面も沢山ね」

弓親の言葉に続くように今度は日番谷が

「俺達は一刻も早く戻らなければならねえ。だからお前達の言うこ
とに従ってる時間はねえんだ」

「——そう、空座町がある『地球』に——」

第二十一話 死神化

「・・・あれ？なんで俺が見えるの？」

男が突如口にした言葉

アリサがその言葉の真意を理解出来るはずもなく

「何を言い出すかと思えば……人間には見えませんがでも言つつもり？」

「いや……その通りなんだけど……」

男は訝しげに少女を見る。普通、人間には自分達の姿は認識することなど出来ない。死神である自分と人間である少女、会話など出来るはずがないのだ。たまに少なからず霊力をもつ人間もいるがそれでもあくまで違和感として感じる程度であって目視出来る者などほとんどいない。先程の執事らしき男が窓から飛び降りるという選択をしたのもそのせいだろう

（いや、しかし……）

最近町を巡回するたびに声をかけてくる少年を思い出す

彼もまた人間でありながら死神である自分に声をかけてくる一人だ。初めて声をかけられた時はおどろいた男だったが声をかけられるたびに順応していった

一見同じ境遇のような少年と少女、しかし彼と彼女では決定的に違うところがあった

それは死神の力の源とも言えるもの、我々を目にするためには必要不可欠な力

すなわち霊力

少年には少なからず（黒崎一護によって引き出された）霊力が感じられた、しかし目の前の少女からは霊力などカケラの力も感じない

霊力がなければ認識できない

少年にはある、だから見える

少女にはない、だけど見える

（……………あれえ？）

考えれば考える程わからない。腕を組み首を捻りながら考える、す

ると

「何を考えてるのか知らないけど――」

痺れを切らした少女が喋り始めた

「先ずはあんたの持つてるその物騒な物、鞘ごとこっちに投げなさい」

少女の要求は自分の持つている斬魄刀を渡せとのことだった

「ガール、そんなに俺が信用出来ないのか？」

「そうね、一度鏡で自分の姿を見ることをお勧めするわ」

全身黒い死覇装に刀を携え、ついでにアフロでゲジマユ。死神を知らないアリサの目には不信者以外の何者でもなかった

右手で拳銃を構えながら左手で斬魄刀を渡すようにジェスチャーするアリサ

「さあ、速く……」

「むう……」

先程思いだした男だが自分に銃なるものは通用しない、現世のものである銃は男に当たることはない

しかしここで斬魄刀を渡さずに相手を刺激してしまうのもよくないと思った男は腰にある斬魄刀を手に取り滑らすかのようにしてアリ

サに向かつて投げた

（まいっか・・・どうせ見えてても触ることは出来ないだろうし。はッ——まてよ、触れないことが解れば俺が人間ではないこと——つまり下着泥棒ではないことも証明されるのでは！？）

妙案と言わんばかりに心踊らせる。ここで自分のことについて説明すればアリサも信じてくれるのではないかと

（そうと決まれば早速——）

「ガールよ・・・渡したのはいいがその刀は特別でな、死神という——つまり俺みたいな存在にしか持つことがきんだ。だからガールのような人間の肉体を持った者には持つこと、いや、触れることさえ出来ないだろう。さあこれで俺が下着泥棒ではないと——」

「持てたわよ」

「うそおッ！?!?」

目を見開いて見てみるとそこには確かに斬魄刀を片手に持っているアリサがいた

「で——下着泥棒が何だって？」

「い、いや——下着泥棒になれたらいいなあって・・・」

「安心しなさい。なってるわよ、現在進行形で」

しまった——間違えた

しかし男の疑問は尽きない。見えるだけならまだしも霊力の塊である斬魄刀に触るなんて聞いたことがない（正確には黒崎一護は触れたがそれを知らない）。しかも霊力がゼロである目の前の女性が

「でもこれ・・・意外と重いわね」

斬魄刀をまじまじと見るアリサ。斬魄刀の重さは普通の物でも平均して一kg弱はある。女性が片手で持ち上げるには少しばかり重い重量だ

そして何を思ったのかアリサは斬魄刀を大きく振りかぶる

「んんっっ！！」

「あの・・・そんなに無理に持ち上げないほうが」

グラグラと不安定にアリサの上で揺れる斬魄刀。その様子を見て不安げになる男。もし死神が斬魄刀で人間を傷付けたとあれば当然罰を受ける、例えそれが死神自らの意思でなくとも

「んんんっっ！！！！」

そしてアリサは振り上げた斬魄刀を

「えい！」

ボキッ

おもいつきり力いっぱい地面に叩きつけた

「ギヤヤアアア!!」

鈍い音とともに二つに分離する鉄の塊、カランカランと言う音をたて地面に転がり落ちる

「これでこの刀はもう使い物にならないわ」

武器である刀を折ることで攻撃の手段を失った男を優越感に浸るように笑いながら見る。しかし

「土鯨うゝ土鯨うううゝ!!」

泣きながら折れた斬魄刀に手を伸ばす男。破片を拾い上げまるで亡くなった家族を見るような目で見つめる

「そ、そんなに泣くことないじゃない。てかあんた刀に名前つけてんの・・・?」

「うつ・・・うつ・・・!!」

まさか泣き出すとは思っていなかったアリサは胸の中に罪悪感が浮かんでくる。

どうしたものかとじっと見つめるアリサ。こうなってしまったのも自分が刀を折ってしまったからだ

（てか相手は下着泥棒よ! 犯罪者よ! 私がこんな気持ちになる必要ないじゃない!!）

そう自分に言い聞かせ気持ちを切り替える。今すべきことはこの男をどうにかして引っ捕らえること

「い、今自首するなら私からも弁明してあげるわ。だから――」

そう言おうとした瞬間だった

《ウオオオオオオツツ!!》

「ツツ!?!」

叫ぶような声が聞こえてきた。怒り、憎しみ、悲しみ、全ての負の感情を一つにまとめあげたような叫び

そんな叫びを聞いたアリサは当然パニック、聞いたこともない声はまるで映画やテレビで見た化け物を連想させる

「何よ……この声!!」

無意識に一歩二歩と後ずさるアリサ。聞いたこともない声に身体が否応なく反応する

先程まで斬魄刀を片手に泣き崩れていた男も聞き覚えのあるその声を聞くと直ぐさま立ち上がり、多少涙を隠しきれないままだが神経を研ぎ澄ましていく。

霊圧を探ることと敵の位置を正確に測ろうとしたのだ……しかし

「——ひッ！！」

男が霊圧を感知する前にアリサの部屋の壁から『何か』が出て来る。壁を擦り抜けて出てきたそれはちょうどアリサと男を挟んで部屋の真ん中の位置に立つようにして止まった

「オオオオオオ——！！」

先程の声の主と思われる化け物がまた叫ぶ。先程よりも至近距離でその声を聞いたアリサは余りの恐怖に喋ることも忘れ怯えた目どその化け物を見続ける

アリサ自身魔法という非化学的なものを知っている、自分には才能がないが友人達が魔法使いでいるいろんな化け物と闘ってきたことも知っていた

しかし知っているだけなのだ

一度、小学三年生の時に魔法を見た。実際に襲われもした。広域魔法と言うとてつもない魔法が私達をも飲み込もうとした

しかし結局それは友人であるのはとフェイトによって防がれた。だから余り恐怖感といったものがなかったのだ。それよりもむしろ何が起こってるのか分からずにア然としているだけだっただろう

だからこそ今までそういった化け物を見たことがないアリサは恐怖した

「い、いや……」

それは無意識だったのかもしれない

アリサが右手に持っていた銃は虚に向けられ、そのまま引きがねをひかれていた

——パン——

銃口から放たれる麻醉針

しかしそれが虚に当たることはない

虚の身体をすりぬけるかのようにして後ろの壁にあたる

「うそ……なんで——!!」

続けて二発、三発と撃つが先程と同様に虚の身体をすりぬける結果に終わるだけ

すると今度は虚がアリサの方を向き、うめき声をあげながら少しずつ距離を詰めていく

「い、いや……来ないで……」

近付いてくる虚から一歩二歩と後ずさるアリサ。しかし後ずさったアリサの背後にあるのは壁、そして逃げ場を無くしたアリサの目の前に迫る虚

虚が右腕を振り上げる

恐らくそれはアリサに向かって振り下ろされるであろう右腕

それを推測していたアリサは目を閉じることで、これからおこるであろう恐怖を反射的に少しでも和らげようとした

「——っっ!!」

しかし一向に感じることはない痛みという感覚

不思議に思い目を開けてみると

「ぬぐうう……」

そこには折れた斬魄刀のみで虚の攻撃を食い止めるアフロの男の姿があった

「あ、あんた……なんで……」

「だから言っただであろっ、俺は下着泥棒ではない・・・と!!」

——ガキン——

そう言うとなんは虚の手を斬魄刀で弾き、隙が出来たことを確認するとそっと手を虚に向けて突き出した

「破道の三十一・・・」

その詠唱は鬼道

男は折れた斬魄刀での攻撃が不可能と考えると死神の戦闘術である四つの内の一つ、鬼道での攻撃を考えたのだ

破道の三十一は赤火砲

灼熱の業火を発生させ、合わせた両手より放つ霊撃技である

しかし

「——赤火砲!!」

——カス——

その手からは何も放たれない

「・・・あるえ？」

男の額に冷や汗が流れる目の前にはまたも手を振りかぶり攻撃を加えようとしている虚。そして今の自分は手を前に突き出しているだけの状態

「ああ・・・俺、鬼道は使えなかった・・・」

その言葉を最後に男は壁にたたき付けられた

「ちょっと！！大丈夫！？」

「ぬぐう・・・」

視界が少しばやけながらも起き上がろうとする。気絶する程の威力ではなかったが打ち所が悪かったのか頭が揺れて身体に力が入らない
そのことを察したのかアリサは数秒考えた後

「その刀・・・貸して」

自らが闘うことを選んだ

先程の麻酔銃では触れることすら出来なかった、しかしどういう原理かは知らないが男が持っているあの刀なら・・・

そう思ったからこそアリサは闘うことを決めた

「ば、馬鹿を言うな！！そんなことより早くここから逃げるガール！！」

死神であるからこそ耐えることが出来る攻撃、ただの人間が喰らえば恐らく一撃で死に追いやられるだろう

男は死神として目の前のアリサにそんなことをさせる訳にはいかなかった

「逃げるって何処に？扉はあの化け物の後ろよ、ただ何もせずに殺されるくらいなら私は闘うわ」

その目は少し恐怖に染まりながらもしっかりと決意に満ちている

確かにこのままいても虚に殺されるだけだろう。だからこそ男は一つの賭けに出た

「ガール。一つだけ方法がある」

「方法・・・？」

「今から俺の力のある方法でガールに授ける」

「——！？なら早く！！」

「しかしその方法を使って失敗すればガールは死ぬだろう。成功率は五割——いや、もう少し低いかもしれん。それでも「やるわ！！」……」

「それしか方法がないのなら、私はそれをする」

今度こそアリサは決意に満ちている

男はふつと笑いアリサを見た

「なら……いくぞ」

後ろから虚の手が迫る中

男はアリサの胸に向かって

斬魄刀を突きつけた

第二十一話 死神化（後書き）

アリサの死神化でずっと考えてしまった結果大分遅れてしまいました

なんかかんや考えましたが結局一護と同じルートに・・・

第二十二話 始動（前書き）

ちよつと早い明けおめゝ

今年最後の更新です

来年も良い年でありますように

第二十二話 始動

「ちょっと待ちい・・・今なんて言っただ・・・？」

日番谷の言葉にそこにいたほとんどの魔道師組が押し黙るように驚愕している。特に地球出身であるのはやはやて、また以前地球に関わりを持ったフェイトにヴォルゲンリッター、さらには地球人を親に持つスバル

彼女達にとって一番大切と言っても過言ではない世界

それが地球だ

「?・・・俺達は地球と言う世界から来たんだが・・・知っているのか？」

日番谷は少し期待したようになのは達を見る。もしなのは達が地球を知っているのならそれこそ話が早い。地球に少しでも早く帰還することができるのだから

「知ってるもなにも・・・」

「私とはやてちゃんは地球出身だし・・・」

「私やシグナム達だって少しだけど地球に住んだことがあるよ」

その言葉に弓親は即座に反応した

「なら話しが早いじゃないかい。君達の故郷を守る為にもなおさら

早く僕達を返すべきだ」

「それは・・・どういう意味ですか？」

弓親の言葉に反応したのはフェイト。弓親の言動を見る限りまるで地球が危機的状況にあるかのように言うのだ

「さっきも言ったでしょ・・・地球にはまだ十体ほどの十刃がいるって」

『——！？』

魔道師組はその言葉を瞬時に理解した。あのルピのような・・・とてつもない力を持った化け物が地球にいる。その言葉が本当ならそれは確かに地球の危機につながることになるのだ。故になのは達は弓親の言葉を無下にはできなかった

弓親もそれをねらっていたのであろうかなのは達の反応に満足気だし

「・・・おかしいですね」

FW陣のリーダー的存在であるティアナが一步前の出で言った

「あなた達死神が本当に地球で今までにその十刃と闘って、先日のような戦闘を行われたのなら私達時空管理局が異変に気付いています。それこそあなた達が時空を越えてきたというのならその時にできた時空の歪みも見逃すことはありません」

「へえ・・・随分と自信あり気だね、僕達の言っていることが嘘だとでも？」

「嘘・・・とまでは言いません。ただ矛盾な点があると言っているだけです」

にらみ合うティアナと弓親。その光景を見ておどするエリオとキヤロ、確かに先日まで敵だったがまさかティアナがこんなにも敵意むき出しにするとは思わなかったからだ

「でも確かに反応はなかった・・・君らを疑う訳やないけど地球でそんなことは起こってへんと思う」

「へえ・・・その目で確かめてもないくせにずいぶんと無責任なことを言うんだね、ここの部隊長は。よくそんなので今まで務まってきたよ・・・」

その瞬間はやての後ろにいたシグナムとヴィータがデバイスを手に取る。それに反応して日番谷が、さらに少し遅れて松本が斬魄刀を手に取りうつとするが

「ストップやヴィータ、シグナム」

その言葉によって静止された

「賢明だね、僕達もここで帰る手段を失いたくない」

ヴィータはギリツと歯ぎしりをする。弓親の物言いに殴り飛ばしたいくらい心底腹を立てているがそれをすれば主であるはやてが困ることになる。それだけは絶対に避けなければならない

不穏な空気が流れる中話は続く

「・・・君らの言い分はわかった。帰りたい場所は地球の空座町でいいんやな？」

「ああ・・・」

日番谷がそう答えるとはやては日番谷の言った空座町の正確な位置についてパソコンで調べ始めた。

しかし調べ始めて数分たつが

「・・・ない」

「なに・・・？」

「調べてみたど・・・空座町なんて町は地球に存在しいひん」

「そんな馬鹿な・・・」

日番谷は実際にパソコンを見る。確かに自分達が見たなかで周辺の地理の中に空座町という文字はなかった

「隊長・・・これは」

「・・・」

日番谷は考える。実際今まで空座町を護ってきた。しかしその空座町が地球には存在しないというのだ。一瞬はやて達が情報を改変し

たのではないかと考えたが直ぐにその考えを捨てた。そんなことをするぐらいなら最初から地球に帰る手段があることすら黙っていただろう

「・・・多分だけど」

不意に言葉を発したフェイトに視線が集まる

「私達の地球と日番谷君達が言ってる地球は違うんじゃないかな・・・」

「どういうことや？フェイトちゃん」

「うん・・・ティアナの言うとおり時空管理局が死神と十刃の闘いについてその霊圧をキャッチ出来てないのはおかしいと思う。それに私やなのはやはやては長い間地球にいたことがあったけど虚なんて一度も見ることがない、ううん・・・霊圧すら感じたことがない」

「確かに・・・」

なのはも賛同するように答える。なのはに至っては魔法使いになって地球にいる期間が一番長い。その間にそういったものは見たことがないし聞いたこともない

「それに今言った空座町が存在しないことも考えると・・・」

「・・・成る程な」

はやてが静かに納得する

日番谷もまた今の話を聞いて考える。確かにこの話が嘘でなければなのは達の地球と日番谷達の地球は別のものとなる。無論弓親の言う通り直接見てみないと信じる事が出来ないがそう急ぐ必要もなくなつた。今の日番谷達には確実に信頼できる情報が必要なのだ

「・・・わかつた。地球の帰還については今すぐには言わねえ、そつちの予定にお合わせてくれていい。だがさっき言っていた俺達とお前達の地球について詳しく調べておいてくれ」

「それでいいんやな・・・？」

「ああ・・・それでいい。」

「君もそれでいいんやな？」

はやては先程までもつとも不満を見せていた弓親に問いかけた

「ああ・・・いいよ。日番谷隊長が決めたことなら僕に文句はない」

そう言つと弓親は組んでいた腕をほどき扉の前まで歩き出した。先程より弓親を快く思っていないヴィータは睨みつけるようにして言う

「何処行くんだよ・・・」

「今後の方針は決まつたでしょ、僕は一角を見てくるよ」

そう言い残し弓親は部隊長室を後にした

「悪いな、部下があんな態度で。だが俺としてもこれ以上は馴れ合うつもりはねえ・・・失礼する」

そう言うと日番谷もはやて達に背を向け扉から出て行った。その光景を見ていた魔道師組はやはりどこか悲嘆な気持ちになる

「わかってたけど・・・」

「やっぱりきついなあ・・・」

はやて達としては日番谷達との関係をなんとかして修復したい。だが自分達が日番谷達にしてきた行いを考えるとやはり難しい

「部隊長として・・・日番谷君がいる内に一言誤りたかったんやけど」

話が終わってから改めて謝りたかったはやて。しかしそれをする前に日番谷が部隊長室から出て行ってしまった

「大丈夫よ」

「え・・・?」

「弓親はともかく隊長は怒ってないから」

その言葉を聞いたはやて達は驚く

「でも、私達あなた達を・・・」

「言っただでしょ、あなた達は虚について知らなかったの。非はないわ」

「でも先程は不機嫌そうでしたよ？」

ツインテールの小柄な少女が言った

「あれは元からの隊長の性格、普段から人と馴れ合おうとしないのよ。私隊長が人のこと名前で呼んだところ見たことないもん。ぜーんぶファミリーネームよ。それに早々とここから出て行ったのもおそらく一角のことを見に行っただんでしょうね」

「・・・」

「・・・それに」

「？」

松本は車椅子に座っているなのを見る

「あんた名前は？」

「た、高町なのはです」

「じゃあなのは、あんたはもう隊長に謝っただんでしょ？」

「はい・・・」

「その時隊長は何て言ってた？」

「えと・・・これ以上気に病む必要はないと・・・」

「そ、じゃあ本当に気に病む必要はないわ。だからあんた達も早く立ち直りなさい。いいわね」

そう言うとき松本も扉の前に立った。するとそれを見たはやてが

「ちょ、ちょっと待ちい!!」

「？」

出て行こうとした松本を引き留める。そしてはやては松本の顔を見た後

「ほんまに・・・ありがとうな」

心の底から感謝してお礼を言った

松本もそれを見てうつすらと微笑み満足気に扉から出て行った

「フェイトちゃん・・・四人分の部屋、確保しといたから案内したつて」

「うん・・・はやて」

とある研究所

「さてと・・・そろそろ行動に移そうか」

長髪の男が発した言葉。その言葉に二人の『仮面の軍勢』が反応する

「あん？やつと動くんかい。随分と遅いのう」

そう言葉を発したのは女

「いい加減お前は口悪いの直せ。今の言い方オッサンみたいやった
——ほべらあ!？」

そう言つて顔を殴られ続けられる男

「それで・・・君たちも手伝ってくれるのかい」

「当たり前や!!死神はうち等が倒したる!!」

「いつふくいつふあんのおんふああふふああふああ（一宿一飯の恩があるからなあ）」

「そうかい・・・それじゃ一緒に行こうか」

運命は回りだす

余計な歯車を入れて

この歯車が一体どのように運命を変えるのか

まだだれも知らないままに

第二十二話 始動（後書き）

弓親以外はなんとか和解に・・・

今でやっとなアニメでいう六話目くらい？まだまだ先は長いなあ

番外編（前書き）

八月に書いて以来ずっと投稿するか迷ってました

でもしかしせつかく書いたものを消すのも勿体ないと思い・・・

正直ggggですそれでも良いと言う人はどうぞ

番外編

〈機動六課内部隊長室〉

「はあ〜〜〜」

大きくため息をつく少女が机の上にある数々の書類を見て怪訝な顔をしながらうなだれる。

「どないしょ・・・これ・・・」

その書類は部隊を運営するために必要なものや先のリアルール闘いの報告書、死神達に関するものもある

「むうう・・・」

正直一番厄介なのは死神に関する事だ。ありのまま起こった事を報告すれば上の連中は必ずと言っていいほど日番谷達を本部へ連れていこうとするに違いない

それは日番谷達にとってもはやて達にとっても好ましい事では無い。連れて行かれたら異端者達として扱われ此処（機動六課）に戻って来れない可能性が高い。

それはまずい。

あのルピは何とか倒せた。話を聞けば此処に来る前にも四対一で闘い、やっとの思いで倒したと言う。それでもエスパードという化け物みたいな奴らの十人中の一人で、強さも下から数えたほうが早いとか。日番谷は恐らくもうエスパードは此処には来ないだろうと言うが、正直なところ不安は拭い取れない。

「はやてちゃん、大丈夫ですか？」

うなだれながら考え込むはやてに自分のユニゾンデバイスであり家族の一員であるリインフォースが喋りかける

「リインく死む」

「はいはい元気ですね。とっとと仕事しやがるですよ」

「ちよつwリイン」

はやての言葉を見事にスルーするリインフォース

はやてとリインフォースにとってこのやり取りは日常茶飯事になっていた

最初の頃はうなだれるはやてを本気で心配してちよこつと休憩を入れていたリインだったが、そのうち何回も繰り返す度にははやては調子に乗って休憩時間を増やしている事にリインが不信に思いはやての仮病を見破ったのだ

「まだまだ働くですよ。この机にある書類が無くなったら休憩する
ですからね。」

人差し指をたてながらリインフォースは言う

「あかん・・・やる気でえへん・・・」

「どのみちやることになるんですから、今のうちに終わらせる方が
楽ですよ。」

「でもなあ。なんかこう、面白い事でもないとやってられんでほん
ま・・・」

「管理局に入ったらそんなのとは無縁ですからね。」

そう自分の中に溜まっている不満を言っていると急にドアをノック
する音が聞こえた

「はやてーいるー?」

その声は女性のもの

「んーいるでえ。」

「入るわよ」

そういつて扉から入ってきたのは松本だった

「はやて。ちょっといい?——ってどうしたの!?!」

「なんや乱菊ちゃんか・・・」

部屋に入ってスライムのように溶けているはやてを見て驚く松本

「どうもこうも仕事が・・・仕事が・・・」

「ああゝ言いたい事は分かったわ」

はやての机にある山盛りの書類を見て大体の事情を察する。自分にも同じような経験があるからか他人事とは思えない松本

「ううゝ乱菊ちゃんは仕事ないの？」

「ああ、うちは良いのよ。仕事は隊長が全部やってくれるから」

「はあゝ日番谷君は頑張りやさんやねんなあ」

「そ、本当に隊長の部下でよかったわゝ私」

そう喋っていると

《松本オオオオーー》

廊下から聞こえてくる大きな声。その声の主は今部隊長室にいる松

本の上官である日番谷の声だった

「乱菊ちゃん、呼ばれとるよ・・・」

「・・・・・・・・」

「乱菊ちゃん？」

返事がない乱菊を見て不思議がるはやて

「は・・・」

「は？」

「はやてえっお願いカクマツテっ」

いきなり松本が泣き付いてきた。いきなり泣き付いてきた松本に一瞬驚いたはやてだったが次の瞬間表情が変わり

「どないしたんや？訳を話してみ？ん？ん？そしたら匿ってあげるで」

面白がつて半ば笑いながら問い掛ける

「じ、実話・・・」

「という事なの・・・」

「成る程なあ・・・」

松本は包み隠さず全てをはやてに話した

「つまり乱菊ちゃんが日番谷君と一緒に書かなあかんという報告書を書かんと逃げて来たっちゅう訳やね」

「うん、隊長が飲み物取りにいつてる内に・・・」

「でも乱菊ちゃん仕事はちゃんとしなあかんでえっ」

「それ、はやてちゃんが言っているいい台詞じゃ無いです」

はやてに向かってツツコムリン

「まあ正直なところ私が苦しんでのに乱菊ちゃんは助かるうって訳にはいかんたいなあ」

「そこをどうかはやて様」

土下座をして頼み込む松本

「ん〜じゃあなんか面白い事一緒に考えてくれたら匿ってあげる」

「考えます！いくらでも考えますー！！」

即答する松本

「よっしゃあ！じゃあこっちゃんおいで」

そついい松本を自分の目の前にある机の下に潜り込ませる

その瞬間部隊長室の扉が勢いよく開かれた

「松本オオ」

「日番谷君、女性のしかも部隊長室の部屋に入る時はちゃんとノックしなあかんで」

「ワリイ、それよりも松本しらねえか？」

「乱菊ちゃん？知らんけど・・・」

「そうか・・・」

少し落胆したように声を漏らす

「あの野郎オ、見つけたら縛り上げてでも机に座らせてやる・・・」

日番谷はそう言い残して部隊長室を後にした

「ふう、危なつかたあ、サンキューはやて」

「ええんよええんよ、結構面白いし、これからもこんな事があったら来てええで」

「あんがとゝはやて」

改めてはやてに感謝する松本

「じゃあ面白い事考えるでー」

「仕事しろです」

「まあまあ今回だけ、なあリン」

リンフォースは少し考え込む仕草をして

「ムウゝ仕方ないです、今回だけですからね」

「なんだかんだでリンフォースも遊びたいのね」

「んでなんかある？乱菊ちゃん」

「んーなんかきっかけないかなー」

そうこう考えている内にまた部隊長室の扉が開かれる

「はやて〜遊ばーぜー」

一通りの仕事を終えたヴィータだった

そのヴィータを見た松本が

「キタコレww」

何かを思いついた

「なんや、なんか思いついたんか？」

「はやてこーいっのはどう？ ヲニヲ ヲニヲ」

「. . . フムフム . . . フムフム キタコレww」

「はやて! !」

「乱菊ちゃん! !」

そっいつて手を握る乱菊とはやて

ヴィータは何か何だか解らないといった状態で

「ヴィータア〜ちよつと遊ばか〜」

「はやて . . . 顔怖い」

笑顔を向けてくるはやてに少し恐怖したヴィータだった

＊＊

「あの野郎・・・」

そついい一人の少年が隊社内を歩く

「俺が録に書類整理出来ない事知ってて逃げやがって・・・」

今現在日番谷の右腕は無い。先の闘いでヴィータを庇った際にルピに斬魄刀で切られてしまったのだ。

一応腕は自身の斬魄刀である氷輪丸で凍結さして、腐らせないようにしているが。

松本が逃げた事によって尸魂界へ帰った時の報告書が仕上がらない

のだ

「今度仕事サボったら飲酒禁止にしてやるつか・・・いや、駄目だ・・・あいつは禁止にしても絶対飲みやがる・・・」

松本への罰を考えながら手当たり次第探していく

食堂

一番いる可能性が高い場所だ。食糧、酒など松本が好みそうなものばかり揃っている

トレーニングルーム

FW陣が訓練している。最近エリオとキャロと仲が良い松本。もしかしたら此処に逃げ込んでいるかもしれない

部隊長の部屋

矢神はやてという少女がいる部屋。正直此処にいる可能性は低いが一応探索する日番谷

いろんな所を探して回る日番谷、だが

「いねえ・・・」

松本の姿が全く見当たらない。

「霊圧もほとんど消してやがる・・・」

霊圧を探ろうとするが松本はそれすら見越して霊圧を極端に下げて隠れるので見つけるのは難しい

「たくつ・・・」

嘆息を尽きながらも探していく。その時

「!？」

とある部屋に長髪 of 金髪が入っていくのが見えた

「見つけた・・・」

瞬間ダッシュでその部屋まで翔ける。そして

「松本オオ」

勢いよく扉を開いた

「ひゃいひゃいひゃい!？」

そこに居たのは仕事が一段落して着替えようとしていたフェイトだった

フェイトはいきなり自室の扉を開けられ大声で叫ばれてとても驚いた声をあげていた

「と、お前はフェイト・・・テストロッサ？」

日番谷は松本だと思っていたので人違いだということに気付いても咄嗟に名前が出てこなかった

「と、冬獅郎君？」

驚きながらも恐る恐る後ろを向くフェイト

「び、びっくりしたあゝ」

フェイトはその場に倒れるかのように座り込んだ

「す、すまねえ。ノックするべきだったな・・・」

座り込んだフェイトを見て先程はやてに言われた事を思い出し、やつてしまったと後悔する

「ほら、大丈夫か」

座り込んだフェイトに手を差し延べる

「うん、ありがとう・・・」

フェイトはその手を取りゆつくりと立ち上がる

「ところでどうかしたの？ 凄い大きい声出してたけど」

「まあな、それより松本知らねえか？」

「乱菊さん？ 知らないけど・・・」

「くそ・・・何処行きやがった、あの野郎・・・」

「乱菊さん、また何かしたんだ・・・」

苦笑いしながらまたかという表情する

「仕事サボって逃げやがった・・・俺一人じ出来ないってのに・・・たく」

「あつそうか・・・冬獅郎君腕が・・・」

そう言って申し訳なさそうな顔をするフェイト

「そうゆう事だ、邪魔したな」

扉を開いてまたも松本探しを再開しようとする日番谷

「待つて」

しかし出ようとした時フェイトに呼び止められた

「わ、私手伝うよ、その仕事・・・」

フェイトが日番谷の仕事を手伝うと言ってきた

「ほ、ほら、私今休憩に入った所だから」

「お前仕事で疲れてるんじゃないのか？」

「そんなことないよ、それに誰かに手伝って貰わなきゃ出来ないんでしょ？その仕事」

「まあ、そうだが・・・」

渋々といった顔をする日番谷

「じゃあ決まりだね！早速行こう」

「おい、俺はまだ——」

そう言つてフェイトは日番谷の手をとり部屋を後にした

＊ ＊

「はやて、これなんかどうかしら？」

「おお、乱菊ちゃんなかなかええセンスしとるやん。せやけどこっちもええで」

「可愛いー！やっぱりずっと一緒にいるだけあってヴィータの似合う服とか分かってるわね」

「ふふん、ヴィータを一番かわゆくできんのは私やー！」

エッヘンと自慢げに話すはやて

その様子を片隅で見守る影が二つ

「はやてちゃんも乱菊ちゃんも生き生きしてるですね」

「んんん！んんん！」

はやて達を見守るリインフォースとバインドで手足を縛られ口にガムテープをつけられたヴィータだった

「ん～～！ん～～！」

「五月蠅いですよ～ヴィータちゃん♪」

「ん～～！ん～～！」

リンフォースの声が聞こえないのか頑なに抵抗するヴィータ。そんなヴィータにリンフォースは

「だからあ～五月蠅いですって——ば！！」

するとヴィータの左頬に何かが掠った感じがした。恐る恐る顔を横に向けるヴィータ、見ると自分の顔の横にある床がめり込んでいた。リンフォースの手によって

「！？！？」

「もうすぐで終わるですから大人しくしてくださいよ～♪」

リンフォースが笑いながら言った。腕を戻す時にパラパラとコンクリートが崩れ落ちる音がヴィータの恐怖をそそる

《ブンブンブン！！》

顔をおもいつきり縦にふり頷くヴィータ。目には少なからず涙が溜まっていた

＊ ＊

「ん．．．これで終わりだね」

「すまねえな、また何か礼はする」

そう言って礼を言う日番谷

「いいって、私が好きでやった事だから」

「まったく．．．松本にも見習わせたいもんだ．．．」

「ふふ．．．」

笑いながら会話をする。時計を見れば既に六時をまわっていた

「あつ．．．もうこんな時間だね、じゃあ私は行くね」

「ああ、すまねえな松本にもきつく言っとく」

「ふふ、ほどほどにしてあげてね」

そう言っただけでフェイトは部屋を後にした。日番谷は時計を確認して

「飯、食いに行くか．．．」

そう言い日番谷も部屋を出た

日番谷が食堂に着いて晩ご飯を注文する

注文した品を持って席に座って食べ始めるが

《ポロツ》

片手の、しかも利き腕じゃない左腕で食べるのでなかなか上手く食べる事が出来ない

《ポロツ》

またも落としてしまっ日番谷

「くそ・・・」

その時

「・・・おい」

後ろから声が聞こえた。振り返ってみると

「・・・・・・・・」

何故かメイド服を着て顔を真っ赤にしたヴィータが立っていた

「何だ・・・てか何してんだ・・・」

「お・・・お前、飯・・・食べねえんだろ・・・」

所々どもりながら言うヴィータ

「わわ、私が・・・く・・・食わ・・・食わ」

言うべき言葉が上手く表現出来ないヴィータ

「食わ・・・食わせ・・・」

「・・・用が無いなら飯が食いたいんだが」

ヴィータの奇怪な行動を理解出来ない日番谷は飯を食べようとするが

「うう・・・あう・・・」

恥ずかし過ぎて今にも頭が爆発しそうなヴィータ遂に言う事が出来ずに

「うつせえバーカバーカバカー」

そう言い残し食堂を出て何処かに行ってしまう

「何なんだ・・・」

日番谷はヴィータの行動に混乱しながらも飯を食べようと箸を持つ。
しかしやはり箸を上手く扱えずに

「しかたねえ・・・氷輪丸」

すれと日番谷の隣に男が現れる

「呼んだか・・・主・・・」

「ああ、少し手伝ってくれ・・・」
そう言つて男、氷輪丸に手伝ってもらい食事をする日番谷

——モニタールーム——

「ちよつ！なんやあの男！？」

「あれは・・・氷輪丸」

「乱菊ちゃん！誰やアレ！！あの不法侵入者は！！」

「あれはねはやて、隊長の斬魄刀が具現化した姿よ」

「斬魄刀？具現化？斬魄刀が具現化？」

「そう、隊長だけじゃなく私、一角、弓親も具現化出来るわ」

斬魄刀について説明していく乱菊

「乱菊ちゃんもできるんですか？見たいですう」

「ふふ・・・また今度ね」

「けどどないすんねん、具現化出来るんやったらうちらが考えたV
×H作戦が実行できひんで」

「そうね・・・まさか具現化までしてくるなんて私も予想してなかったわ・・・」

そう二人が話しているとモニタールームの扉が開いた

「はやてももういいだろ」

半泣きになりながらもヴィータが帰ってきた

「でもねはやて・・・大丈夫よ」

「ほんまか乱菊ちゃん！」

「ええ、氷輪丸には一つ弱点があるわ」

「弱点ですう〜？」

「そう、ゴニョゴニョゴニョ……」

「フムフム……フムフム……なるへそww」

「なあ〜はやて〜私頑張ったから〜」

松本と打ち合わせをしているはやてに必死に許してもらおうと話しかけるヴィータ。しかし松本との話しに集中していてヴィータの言葉が全く聞こえないはやて

「だから今回は確実にヴィータちゃんに掛かってるわ」

「……確かに」

「なあ〜はやて〜アイスもちゃんと一日一個にするからあ〜」

「デメエーは黙ってるですう」

「ひいッ……」

こうして松本達の作戦会議は終わった

＊ ＊

食事を終え部屋で休憩している日番谷。ふと時計を見るともう八時
をまわっていた。

「そろそろ風呂入らねえとな・・・」

日番谷は流魂外にいるおばあちゃんの教えを守り早く寝ている。
いつも九時には、遅くても十時には布団に入るようにしているのだ
寝間着一式をもってシャワー室へ向かう（ちなみに寝間着はエリオ
から借りている）

男子用シャワー室に着くと衣類を脱ぎ始めようとする日番谷。すると

《ガチャ》

シャワー室の扉が開き中に人が入って来る

日番谷が扉の方向に目を向けると・・・

「ぶっッ」

ヴィータがいた。しかもスクール水着を着用して

「て、テエメエなな何考えてやがる！此処は男子用だぞ！！」

《乱菊ちゃんバッチリやゝ！あの反応が見たかったんやゝ！》

《ふふッ・・・氷輪丸の弱点は熱いもの・・・常に体温を低くしてなければならぬ。つまり隊長と一緒に風呂は入れない！！》

《けど風呂場はカメラついてないからなゝわざわざこうしてのぞき見しなあかん》

《そこが難点よねゝ、リンに見張らせてるからいいけど》

リンフォースは今風呂場に誰か来ないか見張っているところだ

《さあヴィータ、洗うんや！体の隅から隅まで洗うんや！！》

「うう．．ぐす．．だつてはやてが．．はやてがあ．」

半泣きになりながらも言葉を繋げていく

「はやてが．．《腕切り落とされてまで守ってもらったんやからちゃんと恩返しせなあかん》って．．」

「．．．．」

「私．．いろいろさせられて．．ぐず．．リン．．も．．怖くて．．」

ヴィータの言う事を黙って聞いている日番谷

「だから．．」

「．．わかった」

言葉を遮るように日番谷が言った

「もついい．．腕の事は気にしないでいいから、とりあえず着替えてこい」

日番谷の言葉を聞いたヴィータは

「．．うん．．あながと．．」

そう言い出ていこうとする。しかし

「ちょっと待て」

扉から出る前に日番谷に止められた

「一つ聞きたい事がある」

ヴィータに問い掛ける

「お前等が作戦を企てたメンバーの中に金髪のアホ女がいなかったか？」

《ドキン》

「いた」

即答するヴィータ

「そうか・・・仕事もサボって何処ほつつき歩いてるかと思ったら・・・」次の瞬間日番谷は瞬歩を使い扉の前まで一気に移動。直ぐさま扉を開けた

「よお、松本・・・久しぶりだな」

「た・・・隊長？」

「覚悟は出来たか？松本・・・それにデメエも」

一人逃げようとするはやての行く先を塞いで睨みつける日番谷

「た、隊長・・・私これから真面目にやります。お酒も禁止します。だから命だけは・・・」

「せや、冬獅郎君はそもそも我慢強さと言つものをやな——」

「問答——無用ッ!!」

その後シャワー室の前には二つの氷で出来たオブジェが出来上がったという

ちなみにリインは見張りをしていたので被害はなかった

「冬獅郎か・・・案外いいやつだな・・・」

そんな呟きがシャワー室に残った

第二十三話 決意（前書き）

年明け一本目です

第二十三話 決意

「一角、もう大丈夫なのかい？」

弓親は機動六課内隊舎を歩く一角に問う。先ほどまでベッドの上で療養中だった一角だったが目を覚ましこれまで起こった事情やこれからの方針を話すと起き上がり歩き出した

「ああ、もう問題ねえ・・・それよりなんか食うもんねえか。腹が減った」

「そうだね、僕はともかく一角はこっちに来てから何も食べてないしね」

空座町からミッドチルダに来てから何も食べていない。途中、なのは達と会う前に森で食べようとした食材もレリックのせいで食べ損ねたので空腹でしかたない一角。弓親に至っては機動六課に来てから食事をとっていた

そんなことを考えながらしばらく食べ物を探し歩いていると一角の目に二人の女の子が写った。

「あん？あいつらは・・・」

二人のうちの一人と目が会う

「げっ・・・」

目が合った二人のうちの一人、オレンジ色の髪をツインテールで縛

った少女ティアナはバツが悪そうな顔をして一角を見る。するとすぐさまもう一人、スバルの手を取り早足でその場を去ろうとするが・

「どこに行くんだい？」

瞬歩を使った弓親によって阻まれた。スバルはいきなり弓親が現れたことでキョトンとしている

「・・・何で道を阻むんですか？どいてください」

「一角が君達に聞きたいことがあるのに逃げようとするからさ」

弓親がそう言っているとスバルが反応した

「聞きたいこと？なんですか？」

「おい、てめえら」

後ろから聞こえてきた声、スバルが振り向くとそこには

「ひゃわっ！！」

今にも餓死しそうな顔の一角がいた

あまりの一角の形相に思わず声をあげティアナの飛びつくスバル。ティアナに至っても少しばかり顔を引きつらせている

「てめえら人様の顔に文句あんのかぁあん！？」

「一角、あんまり脅すと教えてもらえないよ」

「おつとそうだった・・・ということであつて、食料がある場所教える」

「食料・・・ですか？」

「ああ・・・さすがにそろそろ何か腹に入れねえと死んじゃう」

それは一角の顔を見ればすぐにわかった。今にも死にそうな顔をしている

「わ、わかりました、こつちです」

ティアナはまだ渋っていたもののスバルは一角達を食堂まで案内することにした

「よく食べるわね・・・」

「そう？これくらい普通じゃない？」

あれからすぐに食堂に二人を案内したティアナとスバルはお腹がす

いているということでもいつも頼んでいる特盛のスパゲッティを注文し二人の前に置いた。一角はそれを見るやいなやものすごいスピードでたிரけていく

「よっぽどお腹がすいてたのね」

「まあ寝っぱなしだったから仕方ないよね。私なんて一日三食のうち一食でも抜いたら生きていける自信ないよ」

「そんなのあんたとエリオだけよ・・・」

深いため息をつき椅子に腰をおろすティアナ。そのため息は疲れからくるものなのか、それともつい先日まで敵だった者が今目の前でこのうとスパゲッティをたிரけていくのを見てか

「そつえば、質問いいですか？」

「あん？」

スパゲッティを食べている一角と弓親を見て何かを思い出したかのように質問するスバル

「弓親さんと一角さんが隊長達と闘つてる時に刀の形が変わったの、あれが弓親さんと一角さんの始解つてやつですよね？」

「あん？おまえ何で知つてんだ？」

「モニターで見えました」

一角達が闘っている間ずっとモニターでずっと闘いを見ていたスバ

ル達。ティアナの多少興味があるのか黙って一角達を見ている

「そう、あれが僕等の始解だよ」

「始解って普通の状態と比べてどのくらい強くなるんですか？」

興味津々といったように目を輝かせる

「それは死神によってそれぞれだね。僕と一角みたいに刀の形が少し変わって身体能力が上がる者もいれば乱菊さんみたいに身体能力は上がらずに刀が特有の形に変化する者もいる」

「そういえば一角さんは槍になって弓親さんは刃が増えてましたね」

正確に言えば一角の始解は槍ではないし、弓親の始解もまだ完全ではない。弓親の場合一角に知られたくのと別段説明を入れる必要がなかったので「そうだよ」とだけ頷いておく

「一角さんに至ってはシグナム副隊長とほぼ互角にやりあってましたし、凄いですー！」

「シグナム？」

一角の頭に自分を打ち負かした相手、ピンク色のポニーテールの騎士が脳裏に浮かぶ

「ああ、あのヤローか・・・今度はきつちり借りを返させてもらうぜ」

「やめときなさいよ・・・また返り討ちにされるわよ」

「阿呆かぁ・・・今度は俺が勝つ」

斑目一角

護廷十三隊十一番隊第三席、つまり隊が十三ある内のひとつ・・・十一番隊に所属しており強さは第三席の名からわかるように十一番隊のトップから三番目である

綾瀬川弓親

斑目一角同様護廷十三隊十一番隊に所属、席は第五席。フェイト隊長には負けていたが強さは上から五番目という見た目とは裏腹にそれなりに強いという男、ただし性格にやや難あり

弓親はともかく一角に至ってはシグナム副隊長とほぼ互角にやりあう程の強さ。今の自分では手も足も出ないだろう

それが二人の経歴を知りティアナが二人を見て思った感想だ。そうこの目の前の二人が・・・

「妙だとおもわねえか・・・弓親」

「何がだい？・・・一角」

「見る・・・この炭酸飲料、ラベルに砂糖を使ってねえと書いてやがるくせにこんなに甘え・・・これは誰かウラで糸を引いてる奴がいると見たぜ・・・！」

「奇遇だね一角・・・僕も丁度今そこに思い至ったところさ」

（こんな奴等が・・・ねえ）

スパゲツティをがつつく姿や今の阿呆なトークから一角達がそんなに位が上とは思えないティアナ。無論強さは闘いを見て知っているがシグナム副隊長よフェイト隊長から感じる威厳や風格というものがまったく感じられない

それにあの日番谷冬獅郎のような子供でさえ隊長だという。確かに威厳や風格がない訳ではない、実力もあるだろう、もしかしたら頭もまわるのかもしれない

それでもまだどこか納得できない

ティアナは日番谷に対してあまりいい印象を持っていない。それは自分にはない天賦の才能を持っていることへの嫉妬からくるもの。キャロやエリオと変わらない年、あの年で隊長の座に就ける程の才能。羨ましくない訳がない

（私は・・・）

やはり才能がすべてなのだろうか。努力だけでは何も変わらぬのだろうか。そんなことばかりが頭の中を駆け巡る

（ッ！・・・違う！！）

そんなことはないはずだと自分に言い聞かせる。そうでもしないと今までの自分が否定される

「あれ、ティア？どこいくの？」

立ち上がり食堂を後にしようとするティアナ

「クロスミラージュのメンテナンス、新しいの貰ったばかりなんだからあんたもちやんと整備しなさいよ」

（そんなことは絶対にさせない。自分のためにも・・・兄さんのためにも）

ティアナは決意を新たにし訓練室へと向かった

「・・・で、何でこうなったの？」

先ほどまで訓練ルームで自主訓練をしていたはずのティアナ、しかし今は訓練ルーム全体を見下ろせる場所、観戦室にいた。そして訓練ルームにはヴィータ副隊長と先ほどまでもりもりとスパゲッティを食べていたほうの片割れ、弓親が対峙している

「あはは・・・食堂でちよつと・・・」

困った顔で返すスバル、一緒に食堂にいたスバルはすべて知っていた。喧嘩の内容も、無論どちらが悪いかも

スバルのほかにもエリオやキャロ、隊長達や死神達もいる

「はあ・・・」

何が起こったか知らないが自主訓練を潰されたティアナはただただため息をついた

第二十三話 決意（後書き）

ちよいと読者さんにアンケート

今作者は一護を出そうか迷っています。しかし一護を出すと少しばかり考えていたプロットを改変しなければなりません

それはちよつと面倒なのですが皆さんがいちごほしーというのなら株式はやってみようと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1272l/>

魔法少女リリカルなのは～氷原の支配者～

2011年3月14日22時58分発行